

だいじゅうはちかがわきくちかんしょうじゅしやうさくひん
第十八回香川菊池寛賞受賞作品

死の海図

いまい いずみ
今井 泉

いち やみ なか
△一 闇の中で▽
せぼね いた め さ せなか ま
背骨の痛みで目が覚めた。背中を曲げたまま眠りこんでいたようだ。

め ひら はず なに なぜやみ
目は開いている筈なのに何もみえない。何故闇なのだろうかと、二、三秒ぼんやりしていた。

からだ かす しんどう かん
軀に微かな震動を感じた
しんどう
//震動:.....//

ぜんしん そうけた
とたんに、全身、総毛立った。

ホールド なか
//ここは船倉の中だ!//

すぎさき は お あし やわ
杉崎は跳ね起きたが、足もとの柔らかい凹凸に足をとられ、倒れた。船倉に積み込まれた麻袋の間で眠っていたのだ。

うつぶ からだ
俯せた軀にゆったりとした揺れも感じた。

ふね うご
//船が動いている!//

のど いた ひ わめ だ こえ っ
喉が痛いほど干あがった。喚き出しかけたが、声が詰まった。

やみ ホールド と おおこえ だ
この闇は、船倉が閉じられているからなのだ。大声を出しても外に届きはしない。周囲は厚い鋼板で、倉口は航海中、厳重に密閉されている。

お っ お っ
//落ち着け、落ち着くんのだ!//

こどう しんどう と だ むね いた すぎさき かんが
鼓動で心臓が飛び出しそうだ。胸が痛い。杉崎は //考えよう// と懸命になっていた。だが、暗闇が頭の中まで染みこんで、うろたえばかりが駆け巡る。

すわ たいせい た くず じようげ
坐りこんでいる体勢が絶えず崩れそうになった。上下さ
えも定かでない闇なのだ。

すぎさき あさぶくろ うえ は はじ
杉崎は麻袋の上を這い始めた。

てさぐ ホールド かべ たど
手探りで、やっと船倉の壁に辿りついた。
かべ からだ あず すこ きもち らく こんど
壁に軀を預けると、少しは気持が楽になった。今度は、

はかなさが胸を締めつけてきた。

“こんな馬鹿なことが……”

まだ信じられなかった。

何故、荷役が終ったあの時、人夫達と一緒に船倉を出なかつたのだ”

涙が溢れだした。

杉崎は商船大学の三年生だった。一年半ほど前からアルバイトで、神戸港の検数員をやっていた。船に積み、船から降ろされる貨物の個数を数えるのが仕事だった。

港では月末から月初めにかけて、出入港船が集中する。検数作業も忙しくなつて、杉崎達、アルバイト学生の出番が回ってくる。夜通し、荷役の続くことも珍しくなかつた。学生達は好んで徹夜仕事の方を選んだ。学校は怠けることになるのだが、手当がついて金は稼げた。杉崎は昨日で、船から船へと渡り続け、三日目の検数に入っていた。

古米の荷役で、船は一万トンを超す大型貨物船だったが、甲板のあちこちに錆が浮いていて、見るからに老朽船といった感じだった。

船首側から船倉が四つ並んでいて、麻袋に詰まった古米が一回に二十袋ばかり、次々と船底に降りてくる。人夫達は手慣れた動きで袋を積み重ねてゆく。その間をかいぐつて、手早く数を数えなくてはならない。

埃の舞う船倉で杉崎は汗にまみれ、午前中から走り回っていた。

休憩時間、岸壁を覗いてみても、積み残されている麻袋の山は一向に低くなつていない。夕刻近くにはくたびれ果てて、タリー・シートを放り出したくなつていた。

果てしなく続くかと思われた荷役も、夜半を過ぎてようやく終わった。

船倉を半ばまで埋めた麻袋の上へ、杉崎は思わず軀を投げ出した。

人夫達は鉄梯子を上って、引き揚げてゆく。静まった船倉内に独りになった。疲れ果てた軀に初夏の夜気が冷えびえと心良かった。

会社から指定を受けていた検数はこれで終わりだ。大学の寮に帰らなくてはならない。暫く講義にも顔を出してないので、学生仲間からも忘れられそうだ。

しかし、終電車の時刻はとうに過ぎていた。朝までは、検数会社の控え部屋で、汗臭い毛布にくるまって仮眠することになる。

急ぐことはない。どうせ船は夜明けまで出港しないのだ。そう思うと、急に瞼が重くなった。ひと揺りすると、横になった軀が麻袋の谷間に具合良く収まった。それが間違いないものになった。

三日間、溜めていた疲れが杉崎を深い眠りに引き込んでいった。明け方、出港作業の騒がしさにも目覚めず、倉口を閉じた船員も、積荷の間でぼろ切れのように眠っている、

汚れた作業服の男に気付かなかつたのだろう。

もたれている鉄壁の冷たさが、「夢であれば……」の思いにとどめを刺す。真物の恐怖が滲み出してきた。軀が震えてくる。

以前に、本職の検数員から聞いたことがある。

船が着いて、荷揚げのため倉口を開いてみると、貨物の間から干からびた死体が出てきたのさ。荷役に疲れ、つい

眠りこんだ人夫だったんだ。

一旦閉ってしまったえば、船倉は大きな鉄の棺桶みたいなものですからね。

鉄の棺桶とは我ながら巧い例えだと、その時は思ったものだ。

杉崎は闇の中で、膝を抱くようにして坐っていた。剥き出しの両腕が冷たい汗で濡れてねばりつく。

何分か経った。いや何十分かもしれなかった。暗闇は時間の経過も狂わしてしまう。

壁を通して背中せなかに伝わつたってくる機関きかんの振動しんどうだけが、杉崎すぎさきに外界げがいとの繋がりつなを思い起おもこさせた。

機関振動きかんしんどうと重なるかさように、動悸どうきが低くなるひくにつれ杉崎すぎさきはやつと闇を見詰め始めた。

“この船ふねはどこへ向かうむのだろう”

四つの船倉よつ ホールドには全て古米すべ こまいが積み込まれていた。目的港もくてきいこうは

一つしかないひとつのかもしれない。検数員タリーマンは貨物かもつを数えるかぞだけで、行き先いきさきには関心かんしんが無かった。だが、積荷つみにが古米こまいばかりだとい

うことは多分たぶん東南アジアとうなんのどこかに違ちがいがない。行き着くいまで

に何日掛かるなんにちかのだろう。一週間いっしゅうかんか、十日とおかか。

大学だいがくでの三年間さんねんかん、怠け続なまけてきたので杉崎すぎさきは外洋航路がいようこうろの

知識ちしきに疎うとかった。

大型船おおがたせんの速力そくりよくならもつと短い日数みじかで済むにっすうのかもしれない

い。干からびた人夫ひんぶが何日閉じこめられていたのかは聞き洩も

らしたが、俺おれの場合はばあいは………”

杉崎すぎさきは息苦しさいきぐるを感じたかん。作業服さぎようふくの釦ボタンをひきちぎるよう

にして胸むねをはだけた。

“空気くわいきは………” 背筋せすじに寒気さむけがはしつた。

“いや、積荷つみには米だ。通風筒つうふうとうか何かで換気かんきが必要な筈だ”

少ない講義すこの記憶きおくだったが甦よみがった。穀物こくもつは呼吸こきゅうする。

換気かんきをしないと、倉内そうないの湿度しつどが高くなって、内壁ないへきに露つゆを結ぶ。

露つゆが多いと積荷つみにを駄目だめにすることがある。

“すると、この息苦しさいきぐるは、軀からだの下したに何百袋なんびやくふくろと重なかさって

いる古米こまいのせいなのだ”

杉崎すぎさきは詰めていた息いきを大きく吐はいた。

ひとり笑わらいがこみあげてくることなど、そうざらにあるもの

ではない。検数員タリーマンで稼いだ金かせを最初さいしょに手にした時ときは嬉し

った。徹夜てつやの荷役にやくもあつて、一か月まると安サラーマ

ンの月給げつきゅうほどの額がくになっていた。

自分じぶんのような人間にんげんに、まともに金かねを支払しはらってくれる世間せけんの

仕組しくみが甘く、楽しかった。貰もらった金かねを懐ふところに、ひとり笑わらい

がこみあげて止まらなかつた。

それからが病みつきになった。一年半経って、近頃では
会社の方も杉崎を職員同様に扱ってくれる。割の良い
仕事を回してくれるようになっていた。

遊ぶ金に不自由はなかった。将来はともかくも、さしあ
たつては快適な大学生生活だった。満足して暮してきた。昨日
までのことだ。こんな奈落が待っているとは、思いも及ば
なかった。

それにしても湿気が多い。作業服の背中が湿ってきた。
鉄壁が濡れてきたようだ。

「露………」闇の中で火花が散った。

立ち上がって、掌で大きく壁を撫でてみた。思った通り
だ。所々で指先が水滴の冷たさに触れた。

「俺はあの閉じこめられた人夫より、少しは運が良かったよ
うだ」

換気孔を探して何かで塞げば、水滴はもつと多くなるだ
ろう。少なくとも干からびるまでの時間を引き延ばせそうな

気がした。

すぐに換気孔を探しにかかるかとも思ったが、また坐り
こんだ。

「急ぐことはない。どうせ時間は有り余るほどあるんだ」
動き回る気力はまだ出てこなかった。

「空気と水分の目安はついた」そう思うと、杉崎は少し落
ち着いてきた。

気分が落ち着いてくると、空腹を感じた。耳の底で、ラ
ーメン屋のチャルメラの音が聞こえた。「あれを喰っておく
んだった」

いつも夜中近くになると、岸壁へ、ラーメン屋台が流して
くる。休憩時間に人夫達が群がって喰っていた。

杉崎は甲板の手摺りにもたれて、屋台の様子を眺めてい
た。アルバイト料を手にすると、いつも気が大きくなって
すぐに使ってしまうくせに、ラーメン屋に払う金が惜しいと
思う自分の気持が可笑しかった。

“あれを喰くっておくんだった” 小聲ここえと一緒に溜息いっしょ ためいきが出た。

換気孔かんきこうを塞ふさぐには古米こまいの袋ふくろが使つかえそうだ。地ちは粗あらいが、布ぬのに交かわりはない。指先ゆびさきで撫なでてみるとがさがさと音おとを感じかんる。

杉崎すぎさきの頭あたまに、またもや望のぞみが湧わいた。

“そうだ。米こめだ。俺おれは米こめの上うえに坐すわっているんだ。古米こまいでも喰くえないことはないだろう。干ひからびた人夫にんぶより、もう一つ運うんが良よかったんだ”

空くう気き、水みず、米こめ、生いき残のこれそうだ。杉崎すぎさきはそう思おもうことに決きめた。よく考かんえていると何か穴あながありそうな気きもしたが、考かんえ込こむことが恐おそろしかった。

横揺よこゆれが出てきたようだ。外そとの波なみが少すこし大おおきくなったのだらう。船酔ふねよいが心配しんぱいになってきた。杉崎すぎさきは船ふねに酔よう。

“もともと商船しょうせん大学だいがくに入はいったことが間違まちがいだったんだ”
高校こうこうを卒業そつぎょうする時ときまで、杉崎すぎさきは船乗ふなのりになる積つもりなどなかった。入にゅうがく学がくしたのは、経けいざい済さい負ふ担たんが少すくなくて、国立こくりつ、全寮制ぜんりょうせい

の大学だいがくだったからだ。

杉崎すぎさきは中ちゅうがく学校がっこうを卒業そつぎょうした年としに、義父ぎふの家いえから兄あにの家いえに引ひきとられた。

十歳じゅっさい年上としうえの兄あには人形店にんぎょうてんを経けい営えいしていた。

高校こうこうに進すすむ時とき、兄あには杉崎すぎさきに言いった。

“一つ契ひと約やくをしよう。夜よるの八時はちじまで店みせを手伝てつだってくれないか。その義務ぎむを果はたしてくれれば、国立こくりつの大学だいがくになら入いれてやろう”

契けい約やくは厳きびしかった。

“せめて、高校こうこう最さい後ごの半はん年としかん間かんでも俺おれに時じ間かんをくれているなら、満まん足ぞくでできる大学だいがくにも入はいれたんだ”

杉崎すぎさきは闇やみに向むかって呟つぶやいた。

“考かんえてもみろよ。高校こうこうは卒業そつぎょうさせてやったんだ。浪人ろうにんまでさせて、お前まえを大学だいがくにやる義務ぎむが俺おれにあるのかよ”
受じゅ験けんに失しつぱい敗ばいして帰かえった時とき、兄あにの言ことばには哀願あいがんに近ちかい響ひびきがあった。

兄の言い分はいつも理に叶っていた。杉崎に誤りを見せたことが無い。やりきれない兄のくびきから逃げ出せるものなら、大学はどこでも良かったのだ。

そんな時、たまたま商船大学の二次募集があった。受験することにした。

それでも、いくばくかの期待はあった。案内書に、海を背景にして大学が建っていた。広くて、碧い海だった。

しかし、海の色も最初の乗船実習でよく判った。碧くはない。空を映して極まりもなく変る。

暗い灰色の海が嫌いになった。足もとが揺れ動き、絶えず船酔いに苦しめられた。

船酔いは慣れるものかもしれない。職業とした船乗りのことを考えた。狭い船内に閉じ込められて暮すのだ。囲りの海が杉崎の生涯時間を削りとってゆくことだろう。真平だと思った。それからの杉崎は目標の淡い毎日を過ごしてきた。

大学は最低の成績でも良い、卒業だけはしておくことにした。卒業すればした時のことだ。何とか海から逃げ出す方法も見付かるだろう。とりあえずは貴重な学生生活だ。楽しみたいと考えた。

そんな杉崎に、まとまった金の稼げる検数員のアルバイトはありがたかった。大学よりも熱心に、検数会社へ顔を出すようになった。

今となれば、杉崎は哀しい立場に立っていた。船に全く無知なら、泣き、喚き、必死になってこの闇から逃れたいと願うだろう。脱出できないと知るのほもつと先のことだ。船や海を真面目に学んでいれば、良い思案も浮かぶかもしれないなかった。

杉崎はどちらでもない。半端者だった。出席した講義だけでも身を入れて聞いておくんだと悔まれる。

“悔んでばかりいても仕方が無い。まずは換気孔を探さなくては……”

杉崎はやつと立ち上がる気になった。

指を唾で濡らして立ててみた。昔、小説で読んだことがある。洞窟で空気の動きを知る方法だ。話だけのことだった。何も感じられない。壁に掌を沿わして、そろりと移動してみることにした。

五、六歩足を運んだ時、左手が鉄材らしいものに触れた。壁と平行して立ち上がっている。小さい柱だ。探ってみると、どうやら梯子のようだった。甲板から船倉への出入りに使うものだ。無論、上は蓋板で塞がれている。

そのまま横に進みかけたが、ふと考えた。梯子なら杉崎は昨日から、荷役の合間に何度か昇り降りしている。その梯子とは違うようだ。幅も狭く、支柱も細かった。

“何の為の梯子だろう” 見えないと判っていても、つい顔を上げたくなる。

壁は左手を伸ばした所で、右へ直角に曲がっている。

ここは多分船倉の隅に当たっている。真上は倉口を庇のように囲んでいる甲板の筈だった。

“検査孔だ”

やつと講義の一部を思い出した。

航海中、荒天などに遭って、倉内の状態を知りたいことがある。そんな時、倉口を開けないでも済むように、甲板に一人潜れるぐらいの孔を設けてある。そこから船倉に入って、貨物を点検する。普段は蓋を降ろして、蝶番で締めつけ水密になっている。

せつかく思い出した知識だったが、

役立ちそうにもなかった。肩を落しかけたが、

“待てよ……”

杉崎に閃くものがあつた。

“検査孔は甲板ではない。同じ鋼板でも蓋は薄く作られている筈だ。こちらから叩けば、音は外に届くかもしれない。

“とにかくやってみることにだ”

すぎさき はしご のぼ はじ
杉崎は梯子を昇り始めた。

ご ろくだんあ かたあし じょうだん か からだ も あ ととき
五、六段上がり、片足を上段に掛けて軀を持ち上げた時
だ。 あたま はげ う っ つに てんじょう ひく
頭を激しく打ち付けた。積荷で天井が低くなってい
たことを忘れていた。

のどぼとけ つぶ おも あご お
喉仏を潰すかと思うほど顎が折れこんだ。しかし、望み
の方が痛さを忘れさせた。

しょうげき そうない にぶ おと てっぱん うす かん
衝撃で、倉内に鈍い音がこもり、鉄板は薄い感じだった。

すぎさき からだ ゆめ そ くつきさき ふた あた
杉崎は軀を弓なりに反らし、靴先で、蓋とおぼしき辺り
を蹴りあげた。太い太鼓のような音がした。

むちゆう け つづ むり たいせい つか いきぎ
夢中で蹴り続けていたが、無理な体勢で疲れ、息切れが
ひどくなってきた。頑丈な造りの作業靴だが爪先が痛い。

はしご だ やす かんが
梯子を抱いて、休みながら考えた。

おと なに べつ さが ほう よ
“音をたてるのなら、何か別のものを探した方が良さそう
だ”

はしご つか じぶん ゆび かん
ふと、梯子を掴んでいる自分の指を感じた。いや、見える
気がする。

かたて め ちか てのひら たし
片手を目に近づけてみた。掌は確かにそこにあつた。

すぎさき め うえ よこひとすじ しろ にじ
杉崎はこわごわ目を上げた。横一筋に白さが滲んでいる。
けんさこう ふた う
検査孔の蓋がわずかに浮いているようだ。

すぎさき いそ はしご のぼ
杉崎は急いで梯子を昇りつめた。

ふた し わす
“蓋の閉め忘れであつてくれ”

いの きもち ふた かた ちから かぎ お あ
祈る気持で、蓋に肩をあてがった。力の限り押し上げた。
からだ
軀をくねらせ、服の裂けるのも構わず、甲板に転がり出た。

たいぎよ くち はい こさかな いちびよう おく てつぶた
大魚の口に入った小魚のようだ。一秒でも遅れれば、鉄蓋
がまた閉りそうな気がした。

かんばん ころ すぎさき そら み み あおぞら
甲板に転がり、杉崎は空を見た。見たこともない青空だ
つた。嗅いだこともない海の匂いだった。胸一杯に潮風を吸

こ
い込んだ。

だれ かんばん か ひび せ かん
誰かが甲板を駆けてくる。響きを背に感じた。

に しふく せんちよう
△一 私服の船長V

おそ らんぼう せんいんたち
恐ろしく乱暴な船員達だった。

「こん畜生、こんな所に隠れていやがつて」

言葉も荒く、訳を話そうにも暇を与えてくれなかった。

両腕を二人の男に抱えこまれ、引き立てられるように、

操舵室まで連れてゆかれた。

操舵室の入口に、痩せた背の高い男が待っていた。制服

姿で、袖に金モールを二本巻いている。一等航海士だろう。

青黒い、頬骨の突き出した顔をしていた。

中央の窓際には、ずんぐりとした男が立っていた。顔は

海に向けているので、背中しか見えなかったが、青いプレザ

ー・コートを着ている。航海中の操舵室で私服姿が妙に

そぐわなかった。船会社からの便乗者なのかもしれないと

思った。

杉崎はとりあえず、金モールに経緯を話すことにした。

「検数員だつて……………」

話を聞き終ると、ずんぐり男の方がゆっくりと振り向

いた。円顔で額が禿げ上がっている。小さい目が杉崎を見

詰めた。

「そういえば、昨日こいつを見掛けましたよ。二番船倉だつ

たかな」

横合いから、舵輪についている男が口を挟んできた。

杉崎は大急ぎで、大きく頷いた。

「間違いないか」

金モールは念を押している。

ずんぐり男の目が一段と細くなり、目と目の間が開いた。

笑顔のようだが、急に浮べたので、杉崎には何だか造りも

のように見えた。

「今更、神戸に引き返すことはできないよ」

声音も優しくなった。

杉崎は頷いた。窓から船倉が見える。どんな扱いを受け

ようと、あの船倉の闇とは較べようがない。

金モールとずんぐり男は操舵室の隅で何か相談を始め

た。様子では金モールの方が部下のようだ。すると私服の男

は船長なのかもしれない。

船の右手は緑が遠く霞んでいた。左手の山脈は近かった。神戸を出港して南下しているのなら紀伊半島だろう。

「神戸でなくてもいい。あの陸のどこかに降ろして貰えないだろうか」ちらりと、そんな思いが掠めた。しかし相談の結果がどうでも、杉崎は従う他は無い。船倉から出られただけでも幸運だったのだ。

這い出てきた船倉は操舵室から四、五十米はあった。この距離では、検査孔の蓋をいくら叩き続けていても、音は波音にまぎれ、ここまで届かない。

蓋はまだ半開きになったままだった。それにしても汚い船だと思った。見降す甲板は赤茶けて、一面に錆が浮いている。手入れをしていないのだから。先程の乱暴な言葉づかいといい、余程、船員の質の悪い船に違いない。

もつとも、杉崎はそのお陰で助かったとも言える。普通の船で検査孔の閉め忘れなど考えられないことだった。

相談が終って、金モールが戻ってきた。

「下へ連れて行って、飯でも喰わしてやれよ」

「検査員か……」

居室へ向かう背中、杉崎はずんぐり男の呟くような声を聞いた。

風呂に入れて貰い、畳、三畳ばかりの細長い部屋をあてがわれた。渡された折り詰め弁当を、ががつと音がしそ

うな勢いでかき込んだ。腹がふくれ、壁に沿った寝台に横になると、やっと人心地がついてきた。杉崎は低い天井を眺めた。湿気の汚れが

地図のように天井を這っている。陰気な船だ。ここまで案内される通路で、何人かの船員とすれ違ったが、誰一人、笑顔一つ見せなかった。検査員をやってきて、杉崎の接してきた船員達はたいがい陽気で話し好きだった。海では新鮮な話題に飢えているものだ。

杉崎を部屋に連れてきた船員は、弁当を投げるように渡す物も言わずに出ていった。

考えてみれば、海の上にまで出て何故折り詰め弁当なのだろうかと不思議に思えた。

この船は何だかちぐはぐだ。汚れた船内、緩んだ規律、それでいて船員達の表情にどこか張りつめた感じもする。

横揺が大きくなってきた。船が外洋に出たようだ。部屋の丸窓から覗くと、陸影が低く、淡いねずみ色に沈んでゆく。

予想はしていたが、どうやらこのままで、ひと航海つき合わされそうだ。学校への手配、家への連絡も必要だろう。

種々と気に掛かったが後にすることにした。揺れが出て、練習船での船酔いを思い出した。

気分が悪くなって寝台に隠れていると、鬼の教官が探しにくる。『動けば慣れる』と追い立てられた。

甲板の上下動ですぐに胃袋が浮き上がり、油汗が滲み始

める。湧いてくる生唾を飲み込み、こらえた末の嘔吐の味は船酔いした当人でなければ判らないのだ。

傾く海で、さざめきながら飯を喰っている連中の神経が理解できなかった。結局、杉崎は、船乗りとは感覚の違った人種なのだと思ふことにした。

こんな出来事にでも遭わなかったなら、商船大学を卒業したとしても、生涯外洋貨物船の生活を知らずに終るところだった。始めの終りになる航海なら我慢しても損は無、そう考えてくると諦めもついてきた。

ひと眠りと、首まで引き上げた毛布がかび臭かった。出かけた文句が、穴ぐらの闇を思い出してすぐに引っこんだ。舷側の丸窓から夕日の茜が射しこんでいる。赤く丸い影が壁に映り、船が揺れる度に、上下、左右に移動した。ぼんやりと動きを目で追っている内に、いつの間にか杉崎は眠っていた。

夕食だと起こされた。昼間の無愛想な男がまた折り詰め

を運んできた。

そのまま帰ろうとしたので、杉崎は思いきって聞いてみた。

「この船に厨房は無いんですか」

「パントリー……」

男は怪訝そうだ。

「船内で食事は作らないんですか」

戸惑った様子で少し間があった。

「……今、ライス・ボイラーが故障しているんだ……」

言い棄てて男は部屋を出ようとしたが、思い直したように振り向いた。

「お前、アルバイトの学生だろう。よくパントリーなんて言葉を知ってたな」

杉崎は一寸胸を張りたくなかった。

「学校は商船大学なんです」

「何だって」

男の驚きが少し大袈裟だった。暫く杉崎を見詰めていたが、何も言わず部屋を出ていった。

少し経つと、一等航海士を連れて戻ってきた。

「商船大学生だって……」

金モールは怒ったような顔をしている。

「ええ、三年生です」

「何故言わなかった」

「聞かれなかったもので……」

言われてみれば、昼間、杉崎は学生アルバイトとしか話していなかった。しかしそれが何故金モールまで連れてくるほどの問題なのかよく判らなかつた。

「それが何か……」

「いや……別に……」

一等航海士は急いで表情を和らげた。

「それならそれで都合がいいんだ。三年ともなれば航海当直も手伝って貰えるだろうしな。船長に話してみよう」

とってつけたような喋り方だ。しかし、学校を認めて貰
って悪い気持はしない。

「よろしく願います」

頭を下げることにした。

二人が帰ってから、杉崎は考えた。

船長とは矢張りあの私服の男のことだろう。航海当直
なんてやれる自信は無かったが、何とか誤魔化すことが出来
れば、待遇も良くなるかもしれない。

だが、あの一等航海士の目つきだけは気にくわなかった。
罪人でも見るように、鋭い目を杉崎に向けていた。

三日分の睡眠不足を一気に取り戻すような眠りだった。目
覚めはさわやかで、部屋は朝の明るさで充ちていた。

寝台の中で背伸びしたとたん、自分がどこに居るのか思い
出した。

明るさの丸窓を見て、"そうだ、海の上なんだ"と気分が
しぼみ、夢の続きでも見ているように、陸の未練がとりつい
てきた。

便所に行こうと、やっと起き上がる気になった。

部屋から出ると、通路は大きな筒のように薄暗く、ひっそ
りしていた。どこか昨日の感じと違っていた。

船内が静か過ぎた。杉崎は腕時計を見た。八時を回って
いる。

船上での朝は早い。午前八時といえば、船員達がとづく
に作業に掛かっている時間だ。どこにも人の動く気配が感
じられなかった。

静か過ぎる理由にも気付いた。足もとの床に機関の振動
が伝わっていないのだ。

杉崎は階段を一層昇り、士官通路に出た。そこにも人の気
配は無かった。思いきつて、部屋の入口に下がっているカー
テンを開けた。次々と開けていったが、どの部屋にも人は居
なかった。

照明の足りない通路が急に狭く、両側から迫ってくる
気がした。杉崎は逃げ出すように、脇の通路から甲板へ出た。

陽光が渦のように杉崎を包み込んだ。船楼の白い壁が光を跳ねている。

甲板にも人影は無く、錫箔のようにさざ波のきらめく洋上で、静まりかえった船は停止していた。杉崎は、呆然となった。

船が漂っている。

「どうなっているんだ」

「船員はどこに居る」

考え、辿りつく場所は一箇所しかない。杉崎は通路へ引き返し、操舵室へ向かった。

通路の暗さが、何かに後ろから掴まれそうで、階段にかかると、駆け上る足になった。

操舵室への扉を開けた。扉は明るさに向かって大きく開いた。予感は一瞬に変わった。

部屋の中央で、主のない舵輪がゆらゆらと振れている。

「いったいこの船はどうなっているんだ」

杉崎は思わず大声を出した。

こんなに穏やかな海で、船に異状も感じられない。人間だけが消えてしまうとは信じられなかった。どこかに居る筈だ。そうだ薄暗かったが、通路の照明は点っていた。発電機が動いているのなら、機関室に誰か居る

杉崎は軀を返して、機関室へ向かおうとした。

「騒いだって無駄だよ」

間伸びした低い声で、杉崎は飛び上がった。

操舵スタンドの陰に人が居た。軀を寄せ合うようにして三人、坐り込んでいた。

一人が立ち上がって、杉崎に近づいてきた。火ばしのように見える。細身で背が高かった。

「昨日の検数員だな」

声の主だ。普通船員のようにみえた。

「皆はどこに居る」

「こつちが聞きたいよ。船には俺達以外誰も居ないんだ」

他の二人も気怠そうに立ち上がってきた。足どりが重そう
だ。

「どうしてなんだ」

「だから、俺達の方が聞きたいと言ってるだろう。理由が判
らないんだ」

ノツポの男は杉崎より、二つ三つ年上に見えた。

三人は杉崎をとり囲むような形になった。

一人は小柄な年寄りで六十歳は過ぎていよう。もう
一人の方は浅黒い顔色をした中年男だった。

「俺達が目を覚ました時には、もう他の奴等は居なくなつて
いた。残っていたのは三人だけだ。手分けして、船内を探し
回ってみたんだ。眠りこけていたお前以外、誰も見つからな
かった」

中年男が話した。探し疲れているのか口を利くのも
大儀そうだ。

「間違い無く判ったことは……」

若いノツポの方が操舵室の袖の方へ行つた。杉崎も続い
た。

ノツポが指差した船尾の甲板を見て驚いた。救命ボ
トが無くなっている。

ボートを降すために使う大小のロープが、すだれのように
舷側に沿って垂れ下がっていた。海面間近く揺れている。

「そつちも同じことだ」

急いで、反対舷のボートを確かめようとする杉崎に、ノ
ツポが手を振った。

「皆、夜中に逃げ出してしまったのさ」

「何故だ」

杉崎はもう何度も同じ言葉を繰り返していた。

「そうすると、この船は危ないのか」

杉崎の頭から血の気が引いてゆく。

「そうさ、俺達は皆死ぬんだ」

ぼっそりと爺さんが言った。

「心配するなよ爺さん。あれほど確かめたじゃないか。船にどこにも異状は無かったんだ。エンジンが停っている以外はな」

ノツポは爺さんをいたわるように言った。

「それじゃ、何故皆逃げ出したんだ。何故なんだ！」

中年男がノツポに喰ってかかる。ノツポはうんざりした顔を杉崎に向けた。

「朝からずっとこんな調子なんだ。どうどう巡りしている。

貴方に何か良い答えはないもんかね」

「すると、この船に三人だけが残されたというわけか」

「いや、貴方を入れて四人になった。お陰で死ぬ仲間が増え

て心強いよ」

皺だらけで、しぼんだような爺さんの顔が、哀し気に崩れた。

「何故死ぬんだ。お前に何が判る！」

中年男は爺さんに詰め寄った。ノツポが二人の間に分けて入った。

「そんなに苛立っても仕方が無いだろう。落ち着けよ」

結局、操舵スタンドの陰に、今度は四人並んで坐り込んだ。

音の無い船に、舷側をなぶる波の音だけが聞こえてくる。広くしつらえた操舵室の窓から、床の隅々まで明るさが注ぎこんでいる。

四人の顔は暗かった。同じことを考えている。

「何故逃げ出したのだ」「何かがある筈だ」

目覚めてから間も無いというのに、杉崎はひどく疲れを感じていた。

昨日から、あまりにも多くの出来事が重なり過ぎた。

悲観と楽観、苦しみや諦め、様々なことが交互にやって

きて応対の暇も無い。だが今度は真物だった。生死の問題が迫っている。

乗組員が船を棄てたのだ。それなりの理由はあるに違いない。船内を回ったという三人には恐らくそれが見えなかったのだろう。もう一度調べれば、或はその何かが判るかもしれない。杉崎にはそれを言い出す勇気が無かった。"異状は無かった" 心の底でノツポ男の言葉を信じたいと願っている。

判る方が恐ろしかった。乗組員が逃げ出すほどのことを、ここに居る四人で処理できるとは思えなかった。

静かだった。コップ一つ砕けても、今の四人は飛びあがるだろう。それでいて何かを待っている。身構えている杉崎は次第に息苦しさを感じてきた。

四人は晒され者のように並んで、明るさの中に坐り続けていた。

「おい便所へ行かないか」

だしぬけに、ノツポが声を掛けてきた。小声だったが、杉崎は一瞬息を止められた。

“見覚えがある”
その時、杉崎に向けたノツポの顔に、ふとそんな思いが過ぎった。

船には何事も起こらず、正午を過ぎていた。

△三 残された四人▽

光の溢れた操舵室から踏み込むと、通路は夜に見えた。

爪先で探るように階段を降りているうち、しだいに目が慣れてくる。暗く、静まりかえった両側の居室はカーテン一枚動かない。通路が後ろで閉じてくる思いがする。見振るいが出た。

脈絡もなく、子供の頃の情景が甦えつた。

夕暮れ近い小学校の理科教室だ。杉崎は一年生で、喧嘩して独り教室の隅に立たされていた。黄昏が忍び寄ってくる。校舎はひっそりとして誰も居なくなつた。杉崎を罰した教師も、立たせたことをうっかり忘れ、家に帰ってしまった。

つた。そつと窺った廊下がとてつもなく長く、広く見えた。

杉崎は我慢できなくなつて教室から逃げ出した。駆ける廊下が後ろからぐんぐん閉じてくる。片側に並ぶ他の教室に目をやるのも怖かつた。

杉崎はその時の廊下を今歩いている。一足、一足に何かおこが起りそうで、駆け出したい。身構えた固い姿勢でそんな気持ちを押えている。

「この船は沈むと思うか」
便所を出たところで、ノツポが待っていた。

「沈む………」
杉崎が考えまいとしていたことだ。

「貴方はこの船の船員だろう。そつちの方が詳しい筈だ」
「船員………、なるほどな。船に乗っているから船員には違いない」

ノツポが声高に笑い出した。
「何が可笑しい」

思わず大きな声になつた。こんな時の馬鹿笑いに腹が立つた。

「違うんだ………、まあ甲板に出ようや」

ノツポが先に立つた。矢張りこの男にはどこかで会つたことがある。歩く後ろ姿に、そんな思いが強くなつた。風下側の甲板に出ると、船楼の壁が心地良い日溜りをつくつていた。二人は壁にもたれ、海に顔を向けた。

「俺も爺さんも荷役人夫なんだ。出港する三日ほど前、岸壁であの一等航海士に誘われた。給料が良かったんで乗る気になつたが、船は二人とも全く初めてなんだ」

意外だつた。そう言われてみれば、爺さんは、年は喰つているがそんな気もする。だがノツポは船倉の底で働いていた人間には見えなかつた。

「もう一人は………」
「ああ、あの機械屋か」
「機械屋………」

「そう、機械には詳しいといつも威張ってるからな。あいつも船員じゃあない。俺達よりほんの少し前、機関部員として雇われたと言っていた。職業安定所の前でうろろしていたところを誘われたらしい。船に乗ったのは矢張り初めてのようだ」

「何だか話が揃いすぎてるな。船に初めての人間ばかりじゃないか。他にもそんな奴が乗っていたのか」

「判らない。余り話をする暇がなくてこんなことになってしまったからな。だが妙に無愛想な男ばかりが集っている船だった」

きらきらと輝くさざ波が眩しくて、杉崎は遠く、水平線に目を移した。

ノツポの話におかしな気もした。何故海上経験の無い人間を急に三人も乗せたのだろう。正規の手続きでも船員を集めることはできた筈だ。

「こんな大きな船が簡単に沈むことはないだろう。そうだ

な、未来の船長さん」

杉崎はノツポを見た。顎の尖った顔が微笑っている。

「こんな大きな船が……」とは杉崎も思いたいところだ。後に続いた言葉の方が気に掛かった。

「俺を知っているのか」

「ああ、商船大学の学生だろう」

「逃げた奴等に聞いたんだな」

ノツポは頭を振った。

「やっぱり、どこかで会っていたんだ。俺の方も……」せき込んで近づく杉崎を、ノツポが抑えるように言った。

「そんなことよりこの船のことだ。どう思う」

ノツポから笑顔が消え、年上の顔になった。

勢いを削がれ、話の間があいた。

「船員達は俺達が眠っている間に退船したんだ。もう十四五時間は経っている。何を恐がって逃げたにしろ、急いで

たことだけは確かだ。そんなに危ないことならもうとつくに

起こっているでもいい筈だろう。奴等の判断が間違っていた
としか考えられない」

話には半ば杉崎の願望もこもっていた。

「じゃあ、そう思うとするか」

ノツポは話を打ち切るように歩きだした。杉崎の言葉を
総て受け入れたようには見えなかった。二人は操舵室に戻っ
た。

機械屋と爺さんはまだ膝小僧を抱いたまま、同じ姿勢で坐
っていた。

機械屋が頭を上げた。

「遅かったじゃあないか。何かあったのか」

相変わらず怒ったように口を利く。

「船に異状は無い。大丈夫なようだ。そうだな船長さん」

「船長さん……」

爺さんも顔を上げた。

「そう、商船大学の学生さんだ」

「そうか、それじゃ船に詳しいんだな」

爺さんの声に張りがでた。

「俺達はどうなる」

機械屋も勢い込んで聞いてきた。

杉崎は自分に情けなくなった。ノツポ、機械屋、爺さんと

海に素人ばかりだ。

「俺だって素人なんだ」と大声で叫びたかった。聞かれて

も、先ほどノツポに話したことを繰り返すより他はない。

「ここまで何も起こ……」

突然、船底から重い響きが湧き上がってきた。

こもった太鼓のような音が継続して伝わってきた。船体

が鈍く振るえ、波の横揺とは違った傾きが、四人の軀を大

きく泳がせた。

「何だ！」

同時に四人は中腰になった。両手を広げ、凍りついた

まま動けずにいる。眼球だけが辺りを窺って左右に動く。

揺れは余震のように続き、しだいに振幅を小さくしていった。やがて船はもとの静けさに戻った。

四人は互いに顔を見合わせたままだった。

「爆発だ！」杉崎は恐怖と緊張で、背筋に痛みが走った。船底で何か爆発したんだ。船員の逃げ出した理由はこれだったんだ。船が沈む！」

ノツポが最初に動いた。

「行ってみよう」杉崎は頭を振って尻込んだ。

「まだ爆発があるかもしれない」

「どうせそうなら、もう逃げ道は無いんだぞ」杉崎を見据えた。

ノツポの鋭い眼差に促され、杉崎も腹を決めた。揺れが静まってしまおうと、爆発の規模も案外小さいものだったことに気付いた。

「行こう」

機械屋も爺さんも後に続いた。

通路は照明が消えて、黄色い非常灯が点っていた。

「下の方だ」ノツポが居室から機関室へ通じる扉を開けた。下へ続く階段に煙がたちこめていた。

「火事か」

一瞬、先頭のノツポもひるんだが、煙に勢いが無かった。すえた匂いが鼻をつく。よく見ると煙は白く湿っていた。ほとんどが蒸気のようなのだ。

四人は息をつめて階段を降り始めた。

降りるほどに白い煙は薄くなり、階段の中ほどから機関室全体がぼんやりと見渡せた。

機関室は巨大なほらあなだった。天井が高く、黒ずんでいる。縦にも横にも大きく広がっていて、船幅一杯の床には様々な機械が並んでいた。

絹布を裂くような音が聞こえた。船尾側の隅で蒸気が吹き上がっている。薄暗がりの中で、そこだけに乳色の蒸気が渦巻いていた。

床まで降りきって、おそろるおそろる近寄って、四人は立ちすくんでしまった。

附近には折れ曲がった鉄材や、機械の破片が散らばっている。爆発で側壁にき裂が入っていた。海水が細身の刃のようには噴出している。刃は大小様々に、二列になって縦に並び、横倒しになったひととき大きな機械の上に打ちかかっていた。機械からは蒸気が上がり、その合間からくすぶって煙も昇っていた。

どうやら爆発の本体らしかった。幸運にも打ちかかる刃の海水が消化ホースの役目を果たしてくれた。いち早く、火災の芽を消し止めてくれたようだ。

だが幸運ばかりではない。消火ホースは外の海水なのだ。海水が船内に浸入している。

「どうする」
後ろで爺さんの声が震えた。
「何とかならないか」と機械屋が喚く。

ノツポの顔も杉崎に向いた。

杉崎はぼんやりしていた。形の無かった不安は現実になった。不思議に恐怖の実感が湧いてこなかった。淡い非常灯の下で、泡立つ噴水は白く際立って見えた。噴出の一つ一つはそれほど大きくはない。この広い機関室から見れば糸のようなものだと思った。

「おい」

ノツポに小突かれて、杉崎は目を覚ました。機関室の大きさに頼っている幼児のような自分に気付いた。だがどうすれば良いのか見当もつかない。機関室の床は鉄棧でできていた。その下で、もう海水の滞留が始まっているようだった。

「船長の卵だろう。どうすればいいんだ！」

ノツポが苛立ってきた。

杉崎は追いつめられた。三人に責めたてられても、すぐの声が出せないのだ。

練習船でも浸水処置の訓練はやった。器材に卒先して手

をつける奴はいつも決まっていた。杉崎は人垣の後ろにい
て、実習する仲間の背中ばかり見ていた。

「訓練が早く終わればいい」部屋に戻って寝台に横になるこ
とばかりを考えていた。

「防水訓練終了」教官の声で、出来あがりだけは覗いた
ことがある。

「こんなもので本当に浸水が止まるものだろうか」といつ
も疑問に思っていた。仲間の背中からは作業手順は見
えない。

「仕方がない」杉崎は形だけでも真似てみようかと決心し
た。

「これだけの船だ。どこかに防水資材が置いてある筈だ」

「防水資材……」

「厚板や角材、それに大工道具だ」

「それなら船尾の倉庫だ。見たことがある」

爺さんが声をあげた。

「出来るだけ沢山持ってきてくれ。それに部屋から毛布だ」

三人は階段を駆け上がった。独りになった杉崎は
懸命に、訓練の様子を思い出そうとしていた。出来上がりの
一瞥では、毛布を厚板で圧着し、角材を支えに使っていた

ようだ。どうやったのか、とにかく今はやってみる他はない。

教官はセメントを流し込む話しもしていたようだったが
思い出せない。訓練では説明だけで、いつも使ったことが
なかった。

杉崎は広い機関室に独りで居るのが急に心細くなって
きた。噴出する水音が高く聞こえ始めた。

「爺さんでもいい、早く戻って来ないのか」

階段を仰いだ時、ノックが姿を見せた。運んできた資材
を床に投げ落とし始めた。

機械屋も毛布を両腕一杯に抱えてきた。もつと多くと、

杉崎は追い返した。

資材が揃い、薄明りの中で、四人と海水との闘いが始ま
った。

毛布を幾重にも重ね、き裂に沿わせて、板で抑えようとした。支柱で支える前に、何度やっても板が跳ね飛ばされる。海水の噴出孔は小さかったが、凄じい水圧だ。

四人は頭から濡れねずみになり、失敗が続いた。お互いの怒号が交わる。水圧の大きさが四人を必死にさせた。痛いほどの強さで、側壁から降りそそいで来るのは海なのだ。

船が沈む!

途中から意図を呑み込んで、ノツポが作業の中心になった。幾度か、失敗の果てに、仕事が仕事を教え始めた。

毛布を破孔の一つだけにあてがい、あて板なしに直接支柱で止めた。床の突起物を支柱の滑り止めにして斜めに支えた。角材を切り、ハンマーで打ち込み、楔の要領で毛布を圧着した。

破孔の一つ一つを別々に鎮めていった。

鎮まった破孔の両脇へ、支柱を挟むように板をあてがつて毛布の両端を抑え、幾本かの別の支柱で支えることにした。

「これでいいのか」

三、四時間の末に、ノツポが背を伸ばした。機械屋も爺さんも大きく肩で息をしている。

杉崎は、頷いた。

作業の出来あがりには造り損なつた蜘蛛の巣のようだった。おびただしい支柱が縦横に張りめぐらされ、側壁に向かって集まっている。

支柱の先端で圧着された毛布は水を吸ってはちきれそうに膨らんでいた。板や支柱の間から滲み出した海水が壁を伝って流れ落ちていく。見えない所でも、恐らく多量の海水は入り込んでいくだろう。

しかし、白刃のような噴出は消えた。見た目には浸水を止めている。心強い出来映えに見えた。

四人が操舵室へ辿りついた時、海には夕暮れが迫っていた。空腹と疲れと、濡れそぼつた軀には、黄昏の僅かな明るさも、固いが、乾いた床の感触も天国だった。

四人は毛布に包つて、思い思いに寝転がった。

夕日の染め残した海面の紅を、操舵室の天井が映していた。縞模様にはゆらめいて、しだいに淡くなつてゆく。

非常灯が、二、三度点滅したかと思つたと、溶けるように消えてしまった。

「バッテリーがあがつたんだ」

機械屋が呟いた。

誰も応じない。疲れもあつた。その底で四人は同じ思いを噛みしめていた。

「これからどうなる」

居室に降りれば柔らかい寝台があつた。毛布やマットもあるだろう。それでも誰一人動こうとはしなかつた。独りになるのが恐いのだ。

四人にとって、世界は漂流する船、人間はお互いしか存在しなかつた。互いが目の届く所に居たかつた。

「何故、俺達だけが残されたんだ」

ぼつそりと喋る機械屋の顔も定かでない。夜が近づいた。

「爆発までにずいぶん時間があつただろう。俺達を連れて逃げる余裕は充分あつた筈だ」

誰も答えない。

暫く間があつて爺さんが言った。

「とにかく、あれで船は沈まないだろう。なあ、船長さん」

無理に声を大きく言つた。

「どうかな……」

「何故なんだ。浸水は止まつたし、爆発もたいしたことはなかつた。沈むわけは無いだろう」

続いた機械屋の声は爺さんよりも甲高かつた。

「だがな……」杉崎は水圧のことを話そうと思つた。

「もういい……」

ノツポが杉崎を遮つた。

「それより、今の内に食い物を探すんだ。食堂に行けば何

か残っているだろう」

言われて杉崎は胃が痛みました。朝から何も口にしてい
ないのだ。

杉崎が立ち上がるうとすると、ノツポが止めた。

「いや、船長さんはここに居てくれ。見張りも要るだろう。

何かあった時の用心だ。食い物は俺が運んでやる」

ノツポの顔には何か別の意図もありそうに見えたが、逆ら

う理由も無かった。杉崎は従うことにした。

三人が操舵室から居なくなると、杉崎は立って、窓枠に

よりかかった。

西の方にはまだ明るさが残っていた。茜色の空の下から、

ゆったりとしたうねりが運ばれてくる。船はうねりに乗って、

周期の長い横揺を繰り返している。

空腹で下腹が鳴った。

船に乗って、食欲が出たのは初めてのことで「気付いて

杉崎は泣き笑い出したくなった。

海面の消えてゆく紅色の中に何かがあった。先ほど天井

にゆらめいた縞模様を思い浮べていた。何かが心に掛かっ

てくる。それが何なのか。軽いもどかしさから、苛立ちにま

で育ちかけた時、階段を上ってくる、三人のだかららしい足

音を聞いた。

浮かびかけた答えが消えた。

△四 月夜の詩吟▽

その夜、海に月が昇った。

四人は操舵室の壁にもたれ、厨房から持ち返った折り詰

めを喰い、水を飲んで夕食を済ませた。船内は暗く、ノツ

ポ達にはそれだけ探しだすのがやつとのおようだった。水は錆

の匂がした。飯粒は固く冷えきっていて、呑み込む度に喉を

こすり、胃に落ちてからも、ごろごろと下腹あたりを鳴らし

た。

食事の間も、食べ終わった後も誰一人口を利こうとしない。

射し込む月の光りが操舵室の床に明暗を分けて線を描いていた。線は船の揺れにつれて四人の足もとに近寄り、また遠ざかる。明るさが近づいて、杉崎の目に三人の影が映った。疲れ果てているのか身じろぎもない。だが眠ってはいなかった。頭だけが僅かに船の動揺に逆らっている。杉崎と同じように、ぼんやりと明暗の境に顔を向けているように見えた。

一度だけ会話が合った。爺さんが先行きを悲観して涙声を出した。機械屋が怒鳴るように否定し、例によってノツポが割って入った。

「こんなに疲れた頭で、何を考えても無駄なことだ。とにかく明日だ。明日相談しよう。今夜は皆早く眠った方がいい」

杉崎はノツポの言葉を半分納得できた。この状況で先行きを考えるなというほうが無理な話だ。だが考えてゆけばゆくほど、様々な憶測が入り混り混乱してくる。浸水に

ついてもそうだ。不安なのだが、海面から高く、乾いた操舵室の床がどうしてもその不安を薄めてしまおう。何故爆発したのか、何故四人だけ残されたのか、思いの洪水が押し寄せてきて、とても整理できるだけの気力はなかった。

杉崎は黙りこんでうずくまっている操舵室の空気が段々と息苦しくなってきた。思いきって立ち上がると、横手のドアから甲板に出た。

見渡す海面は風が煽って小皺を寄せていた。小皺の一つ一つに月の光りが宿り、輝線となって舷まで伸びている。冷やかな銀色の輝きは回りのうねる海を黒々と際立たせ、杉崎に迫り、近づいてくる。はかなさが胸を締めつけてきた。船がけし粒のように小さいのだ。

「泣いているんじゃないだろうな」

いつの間に来たのか、ノツポが傍に立っていた。杉崎はその落ち着き払った言い草が癪にさわった。この理不尽な状態を叫べるものなら、きっかけは何でもよかったのかもしれない。

「この船がいつまで保つと思ってるんだ！」大声の後ろの方が涙で滲んだ。

「やっぱり、あれでは駄目なのか」

月明りを受けたノツポの顔にそれほど驚いた様子は見えなかった。杉崎も叫んだせい、少しは気持ちが鎮まってきた。

「喫水線の下一米の深さではピンポン玉ぐらいの破孔でも浸水は止められない。もの凄い水圧だと聞いたことがある」

「しかし、浸水は機関室だけのことだろう。船首側にある四つの船倉で浮いていられないのか」

「機関室が水浸しになれば船尾が沈み、それだけ破孔にかかる水圧も大きくなる。水量が増せば、その内機関室と船倉を仕切る隔壁も海水の圧力で破られるだろう」

「ともかく、今すぐのことじゃないんだな。それまでどれ位時間があると思うんだ、船長さん」

「そんなこと判るもんか。それに『船長さん』は止めてくれ。俺は船のことなど何も知らないんだ」

「判っているよ」ノツポは小さく笑った。

「何が判っているというんだ」

「あなたが商船大学で劣等生志願だったということさ」

杉崎は驚いて、ノツポを見詰めた。

「長風浪を破って一帆還る。碧海遙に還る赤間」

関………

ノツポは突然詩吟を始めた。心もち足を開き両手を腰

にあてがって、顔は月に向かっている。

声は、呆然としている杉崎を巻いて、透明な大気の中へ、

鋭く、高く、突き刺さっていった。

「三十六難行くゆく尽きんと欲す。天辺始めて見る鎮西の山………」

「ああ、あの時の立命館か………」杉崎はようやく思い出

せた。二年近くも前のことになる。

「そうだよ、あの時お前さんの愚痴はさんざん聞かされた」

タリーマンを始めて間も無い頃のことだった。夜中近く、

埠頭に雨が降り始め荷役は小休止された。人夫達も杉崎も

岸壁の倉庫に入り、貨物の間で思い思いに疲れた軀を休

めていた。その時、地を這うように詩吟が流れてきた。塵の

舞う倉庫、積み重なった木箱、猥雑な話し声を縫うように

して、どこからか吟声はやってくる。杉崎は場違いに思え

る澄んだ声に引かれ、主を探す気になった。辿ってゆくと、

埠頭の先端で人夫が一人沖に向かって立っていた。さしかか

る倉庫の庇と、夜半の雨の静けさが吟声を心地良く柔らげ

響かせていた。杉崎は、歳の近く思える汚れた作業服の人夫

と詩吟の取り合せに興味を持った。吟い終るのを待つて声

をかけた。その男がノツポだった。二人は雨の止むまで二

時間ほど語り合ったが、杉崎が話し、ノツポはほとんど聞き

役だったように思う。

埠頭は暗く、話しの間ノツポは顔を海に向けていた。横

顔の印象ばかりが強く、今まで思い出せずにいたのだ。

「確かあの時、貴方もアルバイトで、立命館大学の四年生だ

と言った」

「そうだよ、今は人夫……、いや船員かな」

「何故人夫なんか……」

「何故……」

ノツポは不思議そうな顔で聞き返してきた。

「ああそうか、大学まで卒業して何故人夫に、と言いた

んだな。人夫じゃそんなに可笑しいか」

そう言われてみると、杉崎も返事に困ってしまう。ノツポ

は話を続けようとして、途中で気を変えたようだ。

「そんなことより、今はお前さんのことだ。船長さん」

と呼ばれたくないようだが、今お前さんはどうしても船長

でなくちゃいけないんだ。能力や意志には関係ない」

「そんな勝手なことが……」

「いいか、船はさしあたっては浮いている。他の船と出会う

まで……」

「その可能性は無い」杉崎は急いで話を遮った。

「俺は気がついたんだ。この船は……」

杉崎は夕刻、夕日の茜から浮かびかけていた答えをやつと引き出していた。

「まあ待つんだ。聞いてくれ。それじゃ別の話をしよう。

毎年太平洋で何隻もの漁船が遭難している。運良く救命ボートに乗り移れる場合も多い。しかし大半は漂流の四、

五日目で死んでしまうそうだ。何故だと思う」

「凍死か、何かだろう」

「違う、絶望からだ。助かる見込みが無いと思ひ込むことだ」

「ノツポは確信をこめて言い切った。

「何故そんなことを知っている」

「ノツポは暫く答えなかつた。

「俺の親父も海で死んだ」

やがて声を落として話し始めた。

「親父は漁師だった。延縄漁船に乗っていて、北太平洋で船が転覆した。十八人の乗組員のうち、親父も含めて八人が

ゴムボートに乗り移ることができた。七日後、ボートは運良く別の漁船に発見されたが、生き残っていたのは二人だけ

だった。七日の間に他の六人は、次々海へ飛び込んで死んでいったそうだ」

「食糧や水はあったのか」

「助けられた時には残っていた。だがそんなことは関係無い。人間飲まず食わずでも、頑張れば一週間や十日は生き

られるんだ。こんなことは何も親父達だけに限ったことじゃない。数多くの遭難で、いつ時の生死はくぐり抜けられて

も漂流している間に、必ず死を選ぶ人間が出てくるそうだ。

果てしない大洋で、大波を膚に被りながら漂うことがど

んなに心細いものか、助かる望みを失う心境がどんなものか、俺達にはまだ判っていない。漂流しているとは言っても、こんな高い所から海を眺めていられるんだからな。だが遅かれ早かれ、やがては親父達と同じ心境に追い込まれるに違いない。四人が全員生き残るには頼りにする人間が必要だ、望みになる。お前さんはその為の「船長さん」なんだ」

「それなら貴方がやればいい。俺よりはずっと頼り甲斐がある」

「判っていないんだな。俺では駄目なんだ。貴方には商船大学生という肩書きがある。こんな時には肩書きだけでも皆が頼る気になるものなんだ」

「そんなことを言われても、俺だつて死ぬほど怖いんだ。望みを持たせるなんて、そんな知識も度胸も無い。無理な話だ」

「無理でもやって貰う。人の生き死にが掛っているんだ。逃

げていられると思うのか。貴方の泣きごとは二年前の埠頭で充分聞いています。しかし、今立っている場所では泣きごとは通用しないんだぜ」

杉崎にもノツポの話そのものは理解できた。だが自分でも誰かにすがりたいのだ。とても他人の重荷まで背負いきれるものではないと思つた。

「それで、自分は責任逃れか」

杉崎は何とかノツポに抵抗しなかった。ノツポは一瞬きよとんとした。そして笑い出した。

「そうさ、今気がついたのか。実際、お前さんが居てくれて助かったよ。こんな船に乗ったのが因果だと思つて諦めることだな」

「俺はもう寝るよ。船長さんも早く休んだ方がいい。勝負はこれからだからな」

杉崎を置き去るようにして、ノツポは操舵室へ戻つてい

た。杉崎は甲板でまた独りになった。

ノツポのことを考えていた。性格はよく掴めないが妙に憎めなかった。話すことも理には叶っている。確かに四人の中で言えば杉崎だろう。海に出たことがある唯一一人の人間だ。見せかけだけの頼りにはなれるかもしれない。だがどんな望みを作れというのだ。杉崎には想像もつかなかった。

ノツポの詩吟を思い出し、小声で真似てみた。

「長風浪を破つて一帆還る……」最初の節を何度か繰り返している内、次第に声が高くなった。月に向かって吐き出す息で、気持ちが少しずつ明かりに晒され、洗い流されてくるような気がした。

「ノツポは何故荷役人夫なんかになったのだろう」聞き渡らした疑問がふと過ぎった。

朝になって、騒ぎが持ち上がった。

「水が出ないぞ」

機械屋が居室からの階段を駆け上がった。日の出間近い明るさの中で、ノツポと爺さんが飛び起きた。

「蛇口から、初めはしょっぱい水が少し出ていたが、今はそれも止まってしまった」

「水が出ないとはどういうことなんだ」

ノツポの顔が杉崎に向いた。

杉崎は眠りの足りない目で三人を見た。昨夜、操舵室に戻ってから明け方近くまで起きていた。一晩中考え続けた末に、あるていどの予測はあった。

「昨日、夕食に飲んだ水はどこから持ってきたんだ」

杉崎は爺さんに聞いてみた。

「厨房にあった薬罐をそのまま持ってきたよ。それがどうかしたのか」

「発電機が停つて、給水ポンプが動いていない。蛇口から水の出ないのは判る。水が塩水だった理由は一つしかない。この船は初めから清水を積んでいなかったんだ」

自分でも驚くほど穏やかに話せた。

「水を積んでいないんだって……」

「水が無いとなると……」

機械屋と爺さんがうろたえて騒ぎだした。杉崎は昨夜のノツポの言った押しつけ船長の話を思い出し、溜息が出た。

「待ってくれ、話は後にしよう。済まないが船内に残っている水を探してくれないか。食堂や居室、それに風呂桶も確かめてくれ。着岸中に沸した水が残っている筈だ。汚

いが真水には違いないだろうから」ノツポと爺さんに言った。杉崎は機械屋と機関室へ浸水の様子を見に行くことにした。操舵室の後ろに隣合っている無線室で懐中電灯を見付けた。

中央テーブルに備えてある無線用の電鍵を目にして、機械屋が声をあげた。

「貴方なら電信を打てるだろう」

「電源が無いから駄目だよ」

電信は通信士の仕事だ。本職の航海士でも扱えない。

もし扱えたにしても、恐らく使えなくしてあるだろう。

未練がましく無線機を見詰めている機械屋を促して、

二人は機械室に向かった。

非常灯も消えてしまった機関室は闇に近かった。二人は

足先で階段のステップを探るようにして降りていった。

階段を降りきり、床に立った時、だしぬけに水が足もと

を濡してきた。杉崎は背筋が凍りついた。鉄棧でできてい

る床と船底の間が海水で充滿していることになる。機関

室の広さを考えると相当の浸水量だ。

「おい、この水は何だ。海水は昨日で止まったんじゃないか

たのか」

機械屋が声を震わせた。杉崎は答えずに、大きく息を吸う

と奥へ進んだ。

き裂の入った側壁へ電灯の光りを当てた。あて板の両側

からはみ出ている毛布は重そうに膨らんで、海水がしたたり

落ちてゐる。板や材木の陰になつてゐる所では、おそらく浸水は壁に沿つて小さな流れほどにもなつてゐるのだらう。「昨日からの水がこの程度なら、防水の役目は充分果たしているよ」

声が機関室の壁に反響して消えた。隅々から滯溜した水の打ち合う音が聞こえてくる。明るく話した積りが、声音はどうしても弱くなる。

「一寸、ここを一緒に照してくれないか」杉崎は爆発した機械の置かれていたと思われる台座辺りを示した。目を近づけてみると、千切れたボルトが何箇所かに残つてゐた。杉崎はその一つを外して掌に乗せた。機械屋が覗き込んできた。

「ここに乗つかつてゐた機械はなんだったんだらう」船には初めてでも機械屋は機関部員だった。知っているかもしれない。

「補助発電機さ。大きい発電機はもつと真中に置いてあるが、

故障したとかで出港して以来この発電機を使つていたよ」

杉崎は頷いて、今度は倒れてゐる機械の本体を調べにかつた。

「何を捜してゐるんだ」

海水を踏んで動く、機械屋の声に不安気な様子が伝わってくる。

「大丈夫だよ、当分船は浮いていられる。こんなに大きなんだ。」

杉崎は懐中電灯を上や横へ向けてみせた。光りは辺りの暗さに吸い込まれ、天井にも、反対舷の側壁にも届かなかつた。機関室は虚だが、話す杉崎自身も頼りなくなるほどの巨大な空間に思えた。

二人が操舵室に戻ると、ノツポと爺さんも帰つてゐた。「どうだった」

ノツポが急きこむように聞いてきた。

「大丈夫」

短く答えると、ノツポは杉崎の表情を窺う目になつた。

杉崎はその目に二、三度小さく頷き返してから水のこ

とを聞いてみた。「酷い船だよ。水はほとんど無い。飲み残し

や部屋の水差しにあった水も全部集めたがこれだけだった」

爺さんが手に持っていた一升瓶を二本振って見せた。

「風呂の方は士官用のと普通船員用の二つに桶に半分ほど

水が残っていた。汚れてはいたが真水は真水だ」

杉崎はノツポの返事でいくらか安心した。

「汚くても仕方が無い。今のところそいつが頼りだな」

横で機械屋がまた喚きだした。

「皆、よくもそうのんびりと話していられるな。機械室に

は海水が入り続けているし、俺達が今どこに居るのかも、

この先何十日漂流するのも判らないんだぞ。風呂桶の

汚れ水と一升瓶二本の水でどうなるというんだ」

「それじゃ、どうすれば良いと言うんだ」

杉崎は声を抑え、機械屋に向かい合つた。

機械屋は身を振り唇を震わせて言葉を探していたが、

やがて表情が崩れ、肩を落として俯いた。

洋上の太陽はもう昼近くの高さにまで昇っていた。さざ

波に照り返る光りが眩しかった。杉崎は波の遠くに目を向

けた。昨日、夕陽の茜が気付かせてくれたことを話そうと

思った。皆の気持ちを集めなければならぬ。

話せば杉崎は嫌でも四人の中心になつてしまふだろう。

ノツポの押しつけた通りになる。

「一つ一つはつきりさせてゆこう……」

口をきりながら、杉崎はノツポの顔を見たくなかつた。

「この船は初めから沈める積りで出港させたんだ、間違

ない。俺達はその船に残された四人なんだ」

三人の表情にはそれほどの変化は起こらなかつた。

漠然とだが予感があったのだらう。証拠も無く、残された

ことを信じたくない気持ちが今まで話題にすることを避け

させていたのだ。

すぎさき はな はじ
杉崎は話し始めた。

△五 青い海図▽

「二日前、俺が船倉から這い出た後で連れてゆかれた部屋は、丸窓からまともに西日が射し込んでいた。この船はどこへ向かっていたんだ」

「よくは知らないが、東南アジアのどこかだとか言っていたよ」爺さんが答えた。

「古米の積荷だから、多分そんなところだろう。とすればおかしなことになる。船は真横から西日を受けていたのだから、その時船首は南かまたは少し東に振った方角を向いていたことになる。東南アジアへ行くのなら西に近い針路を採るはず。南へ行つたつて海ばかりで何んにも無い。そして、その夜船員が消え、翌日船は爆発した。この船は沈める積りで航海していたんだ」

すぎさき はなし ひやく す
杉崎の話は飛躍し過ぎて、機械屋と爺さんには判らなか

つたようだ。顔を見合わせている。

「船を沈めて、いったいどうしようというんだ」
尋ねた機械屋にはノツポが替って説明を始めた。

「たぶん海上の保険詐欺のことを言っているんだらう。前に新聞で読んだことがある。船に保険金を掛けて沈めてしまふんだ。物が大きいだけに、巧く事故に見せかけることが出来ればたいした金になる。しかも船体は深い海の底だ、調べようが無い。しかしだな……」

ノツポは杉崎に顔を向けた。

「それだけの話じゃ弱いな。船は何かの思わくで南へ進んでいたのかもしれないし、爆発だつて偶然かもしれない。だいいち船員が居なくなつてからの時間が掛かり過ぎていく。それに、船を沈めるにしては少しお粗末な爆発だったとは思わないか。現に船はこうして浮いているんだぜ」
「そうだ。真実に沈める積りなら、もっと確かな方法もあるだろう。メインの発電機を狙うとか、エンジンとか、ちや

ちな補助発電機じゃどうしようもないだろう」

機械屋がノツポに口を揃えた。

「二人共考え違いをしている。爆発は何も規模が大きければ良いというもんじゃやない。船の中央部分は二重底になっている。少々の衝撃では破れないんだ。その点、補助発電機は絶好の位置にあった。外板にも近いし、海面の下にもなっている。壁を傷つけて浸水させるだけでいい。間違

無く船は沈む」

「それじゃ何故沈まなかった。機関室での俺達の手際はお世辞にも巧かったとは言えんだらう」

疑問はもつともだった。杉崎はその答えを探すために機関室へ行ってきたのだ。

「連中は一つだけ計算違いをした。沈めるのに古い船を使ったまでは良かったが、発電機を台座に止めてあったボルトの腐触にまでは気が付かなかった。爆発と同時に本体の発電機までが吹飛んでしまい、その分外板のき裂が小さくなってしまうんだ」

杉崎は機関室から持ち返ったボルトを掌に乗せた。

千切れたボルトの断面は灰色の光沢を見せていたが、所々に黒茶色の錆が噛み込んでいる。三人は次々にボルトを手渡して見入っていた。

「そう言われてみると……」

ノツポが呟いた。

「ライス・ボイラーが故障だとか言って、折り詰めばかり食わされていたが、職員らしい奴だっで見掛けなかったな」

「一つだけ聞いていいかね」

爺さんが、おずおずと口を挟んできた。

「どうせ沈めるんなら、何んであんなに沢山の米を積み込んだらう。ほとんど満載だった。見せかけの積荷でも良かったんじゃないのかね」

「そのことも考えてみたよ。俺が船倉から這い出せたのは検査孔が開っていかなかったお陰だった。初めは閉め忘れかと思っていたが、どうも違うようだ。あれも計画の中に入っていたことだ。」

米だけじゃないが、穀物は一般に水が禁物だ。濡れると

膨張する。一粒、一粒が膨れるんだから、もし船倉に水が

入れば外板なんか簡単に破られてしまうほどの力になる。

爆発で浸水し、甲板が海面に近づけば、検査孔から船倉に

水が入る。あれだけの古米であれば、やがて外板は確実に破

れる。船は沈没し、どこから見てもまともな海難事故とい

うことになる。全く、巧く考えたものだ」

爺さんとノツポは納得に近い顔になったが、機械室は逆

に声高で杉崎に食って掛って来た。

「何故そんなに手間暇かけて、事故に見せかける必要がある。

どうせ仲間以外の俺達は船と一緒に沈めてしまうんだ。話

す奴は居ない。もし仲間以外の人間も連れて逃げたのなら、

どうして俺達だけを残したんだ。

それにもう一つ。どうしても説明つかないことがある。奴

等がわざわざ俺達を雇い入れてこの船に乗せたことだ。それ

が船に残して沈める積りだったのなら立派な殺人だ。いつ

たい俺達を殺してどんな得があるというんだ」

機械屋は話に一息つくくと、唾でも吐きそうな顔になった。

「俺は詐欺師達をよく知っているが、奴等は感心に殺人だ

けには絶対手を出さない。割に合わぬ犯罪だとよく知ってい

るからなんだ」

杉崎は機械屋の話の途中から、ノツポの様子に気が掛か

った。宙を見据えて考え込んでいた。話が跡切れたこと

に気付くと、慌てたように口を開いた。

「俺達のことは乗せた後で気が変わったのかもしれない。とにか

く退船の手際良さや、爆発から考えても、俺は船長さん

の言う通りだと思ふよ。えらい船に乗ったもんだ」

どこか投げやりな口調で、話を打ち切りにしたい様子に

見えた。

機械屋は考えを無視されて不満気だった。話を杉崎に

向けた。

「それじゃ、保険詐欺でも何でもいい。問題は俺達が助か

るかどうかだ。海も船も初めての二人と、役立たずの爺さんだ。船長さん貴方だけが頼りだぜ、よろしく頼むよ」

突然ノツポが声を荒だてて、機械屋に詰め寄った。

「役立たずとは何だ。爆発した時、防水材料の置場所を知っていたのは爺さんだったのだぞ。その為に助かったんだろ、言葉遣いに気をつけたらどうだ」

大声に包まれて、爺さんは俯いた。機械屋は勢いに気圧されて黙りこんでしまった。

一旦、話が絶えてしまうと、それから誰も口を利かなくなつた。一様に力の無い目を海に向けていた。

外から望めば、船は風の海面を陽に晒されてのんびりと漂っているように見えることだろう。だがこの間にも、船の底には確実に海水が入り込んでいる。浸水量は増え続け、助けの見込みは無い。

杉崎は昨夜の、ノツポの言葉を思い出していた。

「お前さんの能力や意志には関係ない」

これまでにだって、杉崎は自分の意志でものごとを決めた記憶は少なかった。引き込み線に停められている貨物車のようなものだった。いつかは気動車が来て曳き出してくれる。その内にどこかへ辿り着けるだろう。それまでは焦らずに待つ氣でいた。

今思えば、タリーマンのアルバイトで初めて金を手にした時も、浮んだ独り笑いは嬉しさだけでは無かつたようだ。たまたま自分で動いてみたら、結果が思いがけない金額で示された。世間の意外な甘さに戸惑つての笑いも混つていたように思う。

だが、今は甘さのかけらも無い。曳いてくれる者も居ない。杉崎の意志とは関わり無く、動かす立場に追い込まれてゆく。海に向かつて静止している三人の姿に、杉崎はそんな現実を認めないわけにはゆかなくなつていた。

「針路の話をしていたようだが、他の船に出会う可能性はどうなんだ」

ノツポの低い声が聞こえてきた。杉崎は頷いて、後ろの壁際にある海図机に向かった。

抽出から適当な海図をと探してみたが、どれも不揃いで、ほとんどが色褪せた古いものばかりだった。

やっと一枚を選び出した。本州の南方洋上のものだった。一米四方ほどの海図を操舵室の床に広げた。

「何だ、これは」
機械屋が目を丸くした。

「海の家図さ」

「何も書いてないじゃないか」

なるほどと思った。海図は全面、海の深さを示す濃淡の青

一色で塗り潰されている。

陸の地図を見慣れた者には奇異に映るものだろう。

「ここが紀伊半島だ」

紙面の北の隅に僅かばかり覗いている緑のくまどりを示した。機械屋はやつと納得した。

「今、船がどこに居るのか、正確には判らない。どのぐらの速度で走っていたのか、いつ船を停めたかでも違ってくる。常識の速度で走り、あの夜の真夜中に船が停つたとすれば……、この辺りになる。紀伊半島の先端から少なくとも二百浬は離れている」

話しながら、杉崎は情けない気分だった。当推量ばかりで、まるで空想の船位だ。差している指先一つでも何十浬と違ってくるのだ。

「この海域だと、内地からどこへ向かう船にしる航路から大きく外れている」

「船に出会うことは無いということか」

機械屋の小さな声だ。

「漁船はどうなんだ」

杉崎はノツポに頭を振った。

「こんな深海ばかりの所に漁場のあるわけがない。それに連中が、他の船に出会いそうな場所で船を沈めると思っ
か」

三人の大きな溜息が聞こえてくるようだった。機械屋も爺さんもうなだれてしまった。一番頼りに思っているノッポでさえふさぎ込んで見えた。

皆のだまりこくった中で、杉崎は思った。漂流はまだ二日前に始まったばかりだ。しかも、さし迫った危険も無いというのにこの始末だ。海を間近に漂う救命ボートだったらどうだろう。「三、四日目で死ぬ気になる奴が出る」

ツポのあの話を信じる気になってきた。

四人の中で、一番滅入っているのは杉崎自身だろう。

青一色の海図の示す広さも、生き延びられる確率の低さも他の者よりは膚に感じている。五日後か、十日後か、まだ現実感はないが、必ずこの船は沈む。どこにも逃げ場はない

い、待っているだけだ。死は確実にやってくる。その時に思いが及べば、身内から小刻みな震えが湧いてきそうになる。床に広げた海図の青が灰色に思えてきた。

「一つだけ望みがある」

杉崎は掠れた声を張り上げた。

「この辺りは黒潮の南の端に当たっている。船は恐らく海流に乗って東へ流されているだろう。その上、北太平洋の高気圧の外側にもなっている。いつも西風が吹き出している筈だ。船が海流と風で東へ向かっているとすれば、この附近まで頑張れば……」

海図の東の隅に、こぼれ落ちそうになって、豆粒のような伊豆諸島が描かれていた。

「南へ向かう外洋航路にもなっているし、漁場もある。漁船も多いだろう。運が良ければ島に近づくかもしれない」杉崎の知識で作りに出せる精一杯の「望み」だった。

絵空事ではないのだと、自分にも言い聞かせながら話していた。

「頑張るより仕方が無いということだな」

ノツポが真先に応えた。そうだと頷きながら、海図に目を落とすと杉崎はまた気持ちが湿ってきた。どう目算しても三百粍以上はありそうだ。一日に二十粍流されるにしても二週間は超えてしまう。それだけの日数、この船が浮いていられるとは到底考えられなかった。

窓から流れ込んできた風が杉崎の頬を撫でた。背伸びして海を眺めても、果てしない広がりだけで流れなど皆目見当もつかなかった。だが風だけは日射しの方角から考えて、間違いなく西の方から吹いていた。作り上げたばかりの「望み」のたった一つの救いのように感じた。

正午を過ぎて、杉崎は独りコンパス甲板に登ってみた。操舵室の屋上にあたり、船では最上層の甲板になる。全周の海が見渡せた。

もしかすると、この海のどこかに逃げた船員達の乗り移った船が居るのではないかと思つた。計画の結果を窺つて、じつと複数の目を凝らしているかもしれないと考えた。

だが視程の届く限り、円形の水平線に到るまで船影は見当らなかつた。彼等は計画に対して絶対の自信で、すでにこの海域から離れてしまつたのだろうか。それとも……。

杉崎は機械屋の反論を考えてみた。

「沈める積りなら何故雇い入れた」

「殺して何の得がある」

二つの疑問には今でも答えられなかつた。四、六時中、寝食を共にしている乗組員達は気心が通じ合える。すぐにも一致した行動はとれるものだろう。残された四人は新参者だつた。退船の知らせを忘れたのかもしれない。しかし脱出した救命ボートの中で気付かぬわけはない。周囲に船の見えない現実、機械屋の疑問に關係無く、彼等が救いの手にはなり得ないことを示していた。

コンパス甲板は、海面から二十米ぐらいの高みになっていた。囲いに手摺りも無い。高さだけうねりの振幅を大きく伝えてくる。海を見降ろしていると足が萎えてきそうなきぶん気分になる。杉崎はタールに被われた甲板に低く腰を落とした。

太陽に向かった海は銀箔を敷きつめたような輝きを見せ、どこまでも広がっている。振り返えった海は遠くから濃紺の暗さを増しつつ眼下にまで迫っていた。

一万トンを越すこの船も、取り囲む海に較べれば点ですら無いだろう。広大な海も微小に漂う船も判らない。水は……、食糧は……。杉崎は自分に三人も
の命が預かれるわけが無いと思った。今、甲板はゆっくりとうねりに上下動している。沈み始めると、船底のき裂のことが胸に突き刺さってきて、喚き出したいほどに不安が募ってくるのだ。

杉崎が望みを作り出した時、三人に僅かだが生気が戻っ

たようだった。話し合う声も高くなつた。額を寄せ合つて海図を覗きこんでいる彼等が羨しかった。疑う知識が無い。// 因果だと諦めることだ”とノツポは言った。杉崎は爪を噛みながら、その言葉を思い返していた。今になってはもう三人の生気を砕くことは出来ないだろう。彼等はすでに杉崎の指示に従って動き始めていた。

ノツポは船首で、万一船に出会った時の為に発煙信号の用意をしている。

機械屋には機関室へ行って工具を探して貰っている。無駄とは思ふが、念の為にタンクを開けて清水を調べてみたかった。

爺さんには飯の方を頼んだ。

「船倉の米は玄米だ。巧く炊けるだろうか」

爺さんは頬に縦皺を寄せた。

「戦争中にはよく食つたもんだ。任せておけよ」

杉崎に頼られて、爺さんは出会って以来初めての笑顔

見せた。

杉崎は今頃になって気づいた。「飯は風呂の残り水で炊くことになる」胃が痛いほど空腹なのに、汚れ水を思っ顔をしかめている。「俺の漂流はまだ始まっていないのか」と頭を振った。

操舵室に下りてみると、機械屋はまだ戻っていなかった。暫くして、ノツポと爺さんが大きな鉄製の鍋を運び上げてきた。蓋の隙間から湯気が立ち昇っている。飯の匂いが鼻をついて、思わず生唾が湧いてきた。

飯鍋を床に降ろすのを待ちかねて手を伸ばした。手づかみで、熱さに掌を踊らせながら飯を口に運んだ。

玄米飯はぼろぼろと辺りにこぼれ落ちる。噛みしめると、一粒、一粒が口の中で蚤でも潰すようにはじけた。濁った灰色の冴えない見掛けにしては意外に甘味があった。食べながら途中で炊き水のことを思い出した。今更遅かった。鍋に伸ばす手の方が止まらなくなっていた。

腹が満ちてくるにつれ、三人はやっと機械屋の遅い帰りを気に掛け始めた。

「探してこようか」

ノツポが腰を浮かしかけた時、階段の方で足音の気配がした。

操舵室のドアが開き、現われた機械屋の姿を見て驚いた。手も顔も油まみれで、衣服は上から下まで濡れそぼっていた。水滴が袖からしたたり落ちていた。

「どうしたんだ」三人から一斉に声が出た。

「矢張り貴方の言った通りだよ。船長さん」

ぼっそりと喋ると、手に提げていたものをそっと床に置いた。機械部品のようだ。

「間違い無い。あの爆発は仕組まれたものだ」

部品は何かの歯車らしかった。直径が十糎ぐらいの円錐形で、斜面に細い溝が並んでいる。

「俺はこれでも以前、鉄工所を持っていたんだ。今は他人に

盗られてしまったがな。だから発電機ぐらいのことは判る。そいつはモーターから発電機へ回転を伝えるための歯車だ。爆発はそいつを利用したんだ。貴方の言った通り、全く巧く考えている。話を聞いて調べる気にならなかったら、まずは誰も気付かなかったらうな」

「とにかく、俺達にも判るように説明してくれないか」
杉崎の言葉に、機械屋はにやりと笑いを浮べた。一回りは歳の違う中年男の顔に戻っていた。爺さんも寄ってきた。

「まずは俺にも飯を食わせてくれよ」
どっかと床に腰を下ろした。

〆六 機械屋と爺さん

「今になって思い出したんだ」
機械屋は話した。

「爆発の直後、機関室へ入った時、油の匂が強かった。あれはどこからかペーパー(霧)状の油煙が漏れ出していたのだ。そこで船長さんの話だ、確かめてみる気になった。歯車の溝を見てくれ、研かれたように光っているだろう。その種の歯車は噛み合わせの部分に僅かな隙間を作っているもんなんだ。そうしないと高速で回転するため熱をもつ。ところが、そいつは受け歯車と隙間無く噛み合っていて、外すのに往生した。その上、油を差した様子も無かった。回転を続けている内、段々と熱が高くなり、その内油煙に引火して爆発するという寸法だ。自然爆発に見えるし、外からでは爆発まで異状も知られない」

「油煙だけで簡単に爆発するものなのか、火が出るぐらいなら判るが……」
杉崎は首をひねった。
「濃度を高くしなければ駄目だ。その歯車はクランク・ケースの近くにあった奴だ。油煙の量は細工し易い箇所だ」

「次第に熱をもたせて爆発させる。一種の時限爆弾というわけか。外板に近く、威力充分と考えた。取付ボルトの腐蝕だけが計算違い。船長さん、貴方の推理が大当りだな」

ノツポが杉崎の肩を叩いた。

「俺が調べなかつたら、闇から闇さ」

機械屋の胸が膨らんだように見えた。

「それで、いよいよ判らなくなつたというわけだ」

爺さんが機械屋に言った。冷たく聞こえた。

「どういう意味だ」

「沈める積りだつたと判つたんだから、貴方が言つてた通りだ。何故三人が乗せられたのかが判らなくなる」

「もうそんなことはどうでもいいさ。こうなつたらどうしても生き残つて、こいつを種に詐欺師共に一泡ふかせてやる」

機械屋は齒車を膝に抱え上げた。

「水も無いのか……」

機械屋はやつと爺さんの声音に気付いて、目を剥いた。

「爺さん、俺に何か恨みでもあるのか」

立ち上がりかけたが、ノツポがまた二人の間に入った。

「二人共、いいかげんにしろよ。いい歳をして、喧嘩して

る場合じゃないだろう」

爺さんはものも言わずに、居室の方へ降りていった。// 役

立たず」と言われたことを根にもつていたようだ。

ドアへ消える爺さんの背中に、

「役立たずの爺じいのくせに……」

機械屋はまた同じ言葉を投げつけた。

杉崎は気持ち沈んでいた。爆発の仕掛を解き明かされてみると、き裂が深刻なものに思えてくる。見た目には浅い

ようでも、致命的なものかもしれない。腐蝕したボルトの話

も、自信が揺らいできた。

船体の軌みがどこからか伝わってくる。気にし始めると

小さな鳴が届く度に、不安が背筋に痛みを走らせた。

爆発から二度目の夜が来た。

「爺さんと機械屋は前からああ仲が悪かったのか」

杉崎とノツポは甲板に出ていた。

空は夕刻あたりから薄雲が広がってきた。今は全天を覆

っている。月明りはあつたが、甲板に二人の影を落とすほ

どの明るさはなかった。

「爺さんも少しひねくれているのさ。前はあんなんじゃなかつた。

俺が人夫仲間に入った時、よく面倒を見てくれたし、仕事

の要領も親切に教えてくれた。去年奥さんが死んでから変

ってきた。皆が飲みに誘っても、女房が待っているから、

と家に帰るんだ。仲間達からはぼけたんだと馬鹿にされだし

た。俺はそうは思わなかった。それだけ大事な奥さんだった

んだろう。力仕事も鈍り、邪魔物扱いされだしたので、船

に誘われついでに一緒に乗ることにしたんだ」

「ぼけちゃ、いないのか」

「さあな、俺は見たものしか信じないんだ。いまも機械屋と

は結構やり合っていたんじゃないか」

「何故一緒に乗る気になったんだ」

「世話になったからな、その分は返す積りだ。それ以上で

も、それ以下でもなくな……」

抑揚の無い声で、相変らずノツポの話は擱めない。当り

前のことを言っているようで、妙に世の中を横目で見詰

めているような感情の淡い話し方をする。

ノツポは空を仰いでいた。鼻梁の高い横顔が影絵のよう

だ。

「天気が心配だな」

影絵の唇が動いた。

「二、三日は大丈夫だろう」

「何故」というように顔が向いた。

「月に傘が掛かっているだろう。あの中に星が三つばかり

見える。天気の崩れるのは三日後だ」

「お前は馬鹿か……」

ノツポが腹を折って笑いだした。

「月に傘の掛かるのは高層雲のせいだ。高層雲は天気崩れる前兆で、見える星の数は層雲の厚さによる。俺だってそれ位のことは知っている。船長ならもつと気の効いた説明をしたらどうなんだ」

「笑うことはないだろう。子供の頃、年寄りに聞いた話をしたまでだ。初めに断わっておいた筈だぞ、何も知らないよ。気象の講義など出席したことも無いんだ。そんなに笑うんなら、俺を船長と呼ぶな」

ノツポは語気の荒い杉崎を気にしている風も無い。言葉だけで謝った。

「悪かったよ、あんまり似合わない話を聞いたもんだから……、」

だが、お前さんを馬鹿にしている積りは無いぞ。その証拠に、貴方は俺を忘れていたが、俺は会った時から二年前のこととは思って出していた。あの時、貴方はしきりに自分の無能さ

を嘆いていた。将来が見えないとこぼしていた。本当は自分を見つけたいと苦しんでいたのさ。自分を見つめて悩むのは能力のある人間のやることなんだ」

「貴方は大学で哲学でも専攻していたのか、言うことはもつともらしいが、ついていけないよ……。それとも自分のことを言っているのか」

「俺は自分を無能だと思っていないし、先行きも考える気が無かっただけのことだ。専攻は文学だった……」

まあそんなことは今、沈みそうな船の上でする話じゃないな。とにかく、お前さんは能力を持っている。一度ぐらい努力をしてみたらどうだ。まずは船の位置を出してみてください」

買い被りもいいところだと杉崎は思った。自分の力が自分が一番良く知っている。だがノツポの言葉はどこか胸に刺さってくる。

二人は操舵室に戻った。機械屋は眠っていたが、爺さんが

居なかつた。

下の方で物音がしていたので、ノツポが様子を見に行つた。
五分ほどで戻つてくると、

「炊事場で何かやっている、放つとけばいい」とそのまま横になつた。

杉崎もそれ以上詮索する気は起こらなかつた。

居室から、寝台のマットを運び上げていた。昨夜よりは寝心地は良い。横になつて、船の位置を出す方法を考へていた。

天測計算は出来なかつた。練習船ではもつぱら他人の答案を回して貰つて誤魔化してきた。地球の丸いことから考へなくてはならない。

寝返りをうつと、ノツポの顔が横にあつた。もう寝ついてゐるようだ。

「俺が眠れないのはこいつが言つた宿題のせいだ」と腹を立てかけたが、おぼろに窺える寝顔に目を注いでゐる内

収まつてきた。両腕を抱え込み、丸まるようにして眠つてゐる。昼間では覗けない、何か哀しみに似た色が滲み出しているように思へた。

爺さんは何をやっているのか、下からの物音は続いている。目を閉じているといつの間にか音は遠ざかつていった。

次の朝、東の空に厚い雲があつて、日の出は見られなかつた。東の空だけでは無い。空全体を昨日よりも濃い層雲が覆つていて、西風も少し強くなつていた。海面の所々に白波が立っている。

「矢張り、時化できそうか」
昨夜の哄笑を忘れたかのように、海を見ている杉崎にノツポが寄つてきた。

「いや、少なくともすぐに時化のくることは無いだろう」
「どうして判る」と聞いてやるべきだろうな」

ノツポの口調が始まつた。
「うねりの様子にあまり変化が無い。うねりは波長の長い奴

「ほど早く伝播してくるんだ。そいつが来るようになれば
要注意だ、時化が続いている」

「ちぐはくだな」

杉崎の知識のことを言っているのだろう。

「何しろ、とびとびの大学講義だったからな。ところで船位
を知る方法は考えついたよ。ひと晩かかったが、こいつは
教わった知識じゃないぜ」

「どうやって知るんだ」

「船位は緯度と経度で決まる。緯度の方は北極星の高度を
測れば良いことぐらい子供でも知っているだろう。問題は
経度だ。日の出の時刻で判る。」

俺達の時計は神戸の明石、東経一三五度が基準になっ
ている。世界の時差は地球一周で二十四時間だから、一
時間日の出が違えば、明石の経度線から十五度ほどずれてい
ることになる。この割合いで、時間差から経度を出せば良い」
「肝心の明石の日の出は何で知るんだ」

「新聞に出ているよ、船の中を探せば新聞の二三枚は見付
かるだろう。日付の違いと、日出時刻の違いで、今日の日の
出時刻も割り出せる筈だ。今は夏至に近いから一日に一分
違えばいいところだろう。それにこんな広い大洋の中だ。仮
に四、五十哩誤差があつてもどうということはないさ」

「なるほど、考えれば素人でも判ることだ。太陽が顔を出
さなくて残念だったな」

ノツポはやつと感心した。

杉崎には隠していることがあつた。本当の日の出時間は
緯度によつても修正が必要だった。だがそれは時間表でも
無ければ無理な話だ。さきほどの四、五十哩誤差に繰り入
れば良い。あの青い海図の上では、助かる意味とは関わり
薄いことだと思つた。

杉崎はノツポに昨夜の解答をしたかつた。船位の計算で
きることを知らせたかつただけのことだった。

爺さんが朝飯を持ってきた。

おどろ 驚いたことに、切り身の焼き魚がついていた。針金で作った釣針と、布切れの擬似餌で朝早くから苦勞した成果だそう。もつとでかい奴を逃がしたと悔しがっていた。

よご みず げんまいめしいがい 汚れ水の玄米飯以外、喰い物にありつけるとは思っていない。かっただけに嬉しかった。機械屋も素直に旨そうな顔をして喰った。

じい すぎさき きかいや ちくち 爺さんはそんな杉崎と機械屋の口もとを見詰めている。すぎさき めし とちゆう きづ げんまいめし いろ きのう かわ み 杉崎は飯の途中で気付いた。玄米飯の色が昨日と変って見ええた。白さが増して、匂も薄くなっている。

じい かお みあ わら 爺さんと爺さんが顔を見合わせて笑っていた。き つつ はや めし す おどろ 気が付いたか。早く飯を済ませてしまえ。驚くものを見せ「てやる。爺さんのお手柄だ」

ふたり いそ 爺さんは二人を急がせた。

ちようしよく おわ 朝食が終ると、ノッポが先に立って厨房に向かった。パントリー きよしつ いちばんせんびよ あか 厨房は居室の一番船尾寄りであって、明り通りの窓を広くとってある。照明は無くても室内は自然光で結構明るか

なか はい 中に入ったとたん熱気が襲ってきた。見ると、炊事用の大型レンヂの下で、小さな火事場ほどの炎が上がっている。

うえ ゆわか よう おお の レンヂの上には湯湧し用の大きなやかんが乗っていた。やかんの口にゴムホースが嵌め込まれ床にまで導かれている。ゆか もうふ くる は こ ちか 導かれている。ホースは床で毛布に包まれていた。爺さんは毛布に汲み上げた海水を掛けていた。ホースの先端には鍋があてがわれていて、水滴が絶え間なくしたり落ちていた。

ふた てつぎ ま おも やかんの蓋には鉄材を曲げて作った重しがしてある。隙間から湯気が吹き出していた。あたりには机や椅子の壊された木片が一面に散らばっている。夜中の物音の原因が判った。

ふるみず くら つか 風呂水はすぐに腐って使えなくなる。すぎさき じょうりゆうすい 杉崎も蒸溜水を考えないわけでは無かったが、爺さんが先手を打つとは思ってもいなかった。

と 「どれぐらい採れるんだ」

「昨夜から一升瓶で二本だ」

二十四時間で十リットル近くは作れそう。もう一つ装置を増せば倍になる。四人ならこれで水の心配はしなくても済む。燃料はその辺りの家具を壊してゆけばいい。

「ひと晩中起きていたのか」

機械屋の目玉が大きくなっていった。

「ああ……、魚だつてもつと釣れそうだ、だいぶ大きい奴を逃がしたからな。釣針と餌を工夫すれば、毎食喰わせてやるよ」

「どうだ、役立たずは取り消すかね」

ノツポが機械屋に言った。機械屋は大きく頷いた。

「たいしたもんだ。頼むよ爺さん、水は命の綱だからな」
爺さんは怒った様な顔をして、しきりに首筋辺りを掻いていた。

厨房は爺さんに任せることにした。三人はその足で機関室へ降りていった。浸水は同じ程度で続いている様子だつ

た。海水が階段の一番下の段を洗っていた。だが毛布を圧着している支柱に変わった形跡は無かった。矢張り機関室の広さが心強かった。すぐの不安は感じられない。それ以上考えても無駄なことだ。

「大丈夫か」

上段に居る機械屋の声が降ってきた。

「こんなもんだらう。少しずつは増えてゆくんだ」
杉崎は努めて明るく答えた。並んだノツポは口を利かなかつた。

昼飯の時、杉崎は更めて四人の分担を決めた。

食事と水の係りは爺さんにやって貰うことにした。他の三人は二時間交代で、一人は操舵室で海上見張り、残る二人で、機関室の海水を汲み出すことにした。滑車とロープを使い、井戸水を汲む瓶の要領を使う。

海水の汲み出しには最初機械屋が反対した。たらいの水を小匙で掬うようなものだと言うのだ。その通りだと思つた。

だが小匙でもいい、掬っていることが大事なのだ。ノツポは判ってくれたようだった。二対一で実行が決った。

夜は四人が一人ずつ交代で、蒸溜水作りを見守ることになった。

漂流が始まって三度目の夜が来た。杉崎は独り操舵室に居た。他の三人は厨房の炎の回りで雑談しているようだ。

その夜の海は暗かった。風も冷たくて甲板に出る気がしない。窓ガラスを通して、ぼんやりと四つの船倉が見えていた。

杉崎は幾つかの漂流物語を知っていた。ほとんどが実話にもとづいたものだ。杉崎には、それ等の登場人物に自分も仲間入りしているのだという実感がどうしても湧いてこなかった。

考えてみれば、こんな大きな船で水と食糧は曲りなりにも確保されている。そんな漂流の話は聞いたことも無かった。

眼下に伸びているあの広い甲板がそうさせるのかもしれない。飛んでも跳ねても、走ってもいい。安定感が不安を遠ざけている。しかし、と頭を振る。間違い無くこの船は何日後かには沈没する。その日の予想は杉崎に思い及ばなかった。

四つの船倉の浮力がいつまで船を浮べていられるのか。機関室と船倉を仕切る隔壁がどこまで支えていられるのか。明日では無いにしろ、倒れてゆく建物の上にいるようなものだ。それは漂流とは異質の想いで、風を遮蔽した操舵室の中の杉崎を締めつけてくる。

どこからか風鳴りが細く聞こえてくる。波が舷側で碎け、震えるような振動が伝わってくる。うねりが変わったのか、少し横揺れも大きくなってきた気がする。

闇を透しても海面は見えなかった。僅かに波頂らしい白さが一筋光っては消えていった。

なな ていきあつ なか
^七 低気圧の中でv

つぎ あさ うみ おも はいいろ み とが なみ
次の朝、海は重そうな灰色に見えた。尖った波がそこか
おど はちよう なが とお
しこで踊っている。波長の長いうねりがやってくる。遠く
へいたん うみ ちか こうてい あらわ
で平坦な海が近づくにつれ高低を顕にする。船はうねりと
へいこう よこ しゃめん す たび かたむ
平行に横たわり、斜面が過ぎてゆく度にゆっくりと傾いた。
とお かいめん りゆうせん さきぶ わか
遠ざかる海面の流線は荒天の先触れだと判っていてな
めらかで優し気に見える。

そら きのう あつ くも おお うみ そら くら
空を昨日より厚みを増した雲が覆っていた。海と空の暗
いろあ そうだしつ なか にじ こ
い色合いが操舵室の中まで滲み込んでくるようだ。

つ きよう てんこう ま よにん きもち お
それでも幸運だった”と杉崎は思った。四人の気持が落
ち着いてきた今日まで、天候は待ってくれたのだ。

せいど あ かべ きあつけい か か ふた
精度は当てにならないが、壁に気圧計が掛かっていた。今
さめ ささ あ あ しど
朝目が覚めて、すぐに合わせておいた示度から二ミリバール
ほど下がっている。

きかいや つか ようす もど きのうき
ノツポと機械屋が疲れた様子で戻ってきた。昨日決めてお
につかどお あさはや きかんしつ かいすい く だ か
いた日課通り、朝早くから機関室の海水の汲み出しに掛か
っていたのだ。

じい けっこう いまみ さかな にひきつ
「爺さんも結構やるもんだ。今見てきたが、魚を二匹釣り
あげていたよ。昼は刺身を喰わせてくれるそうだ」

きかいや きのう えがお おお
機械屋は昨日から笑顔が多くなった。

こんど おれ ばん みは
「今度は俺の番だな、どっちが見張りなんだ」

すぎさき き
杉崎が聞いた。

おれ いちどい あんた やす ひ
「俺がもう一度行くよ、貴方はここにいて休め」すぐに引
かえ かいや きかいや かたて おさ
返そうとする機械屋を、ノツポが片手を上げて抑えた。

ひとやす みず たま な
「まあ一休みしろよ。水はたっぷり溜っている。無くなり
しないよ」

さんじん すわ
「それもそうだな」三人は坐りこんだ。

すこ ゆ おお がいはん わ め だい
「少し揺れが大きくなったようだが、外板の割れ目は大
丈夫だろうか」

しんぱいがお きかいや こた
ノツポの心配顔に機械屋が応えた。

よこゆ うち だいじようぶ てっばん ひ ば あつしゆく よわ
「横揺れの内は大丈夫。鉄板は引っぱりよりも圧縮に弱い
ものなんだ。圧縮されれば小さな皺が寄る。局部で凸凹が
できて大きな力が掛かり裂けてしまう。縦揺れでなければ、

「外板にも圧縮力はたいして掛からないだろう」

杉崎は改めて機械屋の顔を眺めた。さすがに、もと鉄工所の社長だっただけのことはある。言われてみればその通りかもしれない。

大型貨物船が太平洋の真中で、二つに折れた海難を聞いたことがある。今までは大きなうねりに乗ったので二つ折りにされたのだと単純に考えていた。

「もつと浸水を少なくする方法は無いのかな」ノツポが呟いた。

「船を軽くしたらどうだ。時化に会って、積荷を海に投げこむ映画を見たことがある」

機械屋の顔が杉崎に向いた。杉崎は頭を振った。

「一番手前の船倉の積荷は、機関室へ入った海水の隔壁にかかる圧力を支えることになるだろう。船首側を軽くすれば重量が片寄って、却って船尾側が沈むに違いない。それに、あんな大量の米だ、とても三人や四人で片付く代物じゃあないだろう」

「矢張り汲み出すより手は無いか……」

両膝を叩いて、機械屋は立ち上がった。杉崎もそのあとに続いた。

居室と機関室を仕切るドアが開け放たれていた。階段へかかるすぐのステップの手摺りに滑車が縛り付けてあった。馬穴が一つへばりついていて、機械屋の話では垂れているもう一方のロープの先端にも馬穴が取り付けてあるそう。ロープの両端を交互に曳き上げて海水を汲み上げていたようだ。

杉崎は階段を下へ降りてみた。床から二段ぐらい手前で足もとが濡れた。暗さの中で、中央の大きな機械が島のように海水にとりまかれて洗われている。

き裂の外板に行ってみようと思つたが、淡い懐中電灯の光りを当ててみたところでは、縦横に張った防水支柱はまだ健在なようだった。耳を澄ませても激しい水音は無い。今更防水の効果を確かめたところで、これ以上浸水量が少

なくなるとは思えなかった。

階段を上る背中、水面の揺れる音を聞いた。寒さも無いのに身震いが出た。

二人で海水の汲み上げを始めた。馬穴の水は通路側に空ける。流れてゆくところを見ると、どこかに排水孔でもあるのだろう。

始めた直後の馬穴は軽々と曳き上げられた。続けている内に少しずつ重くなってくる。手摺り越しに馬穴を抱え上げ通路に空ける。単調な動作の繰り返しで、やがて背筋が痛み始め、掌が擦り剥けそうに熱くなった。一休みと言いだしかけたが、機械屋は黙々と続けている。発案者の杉崎が先に鳴を上げるわけにはゆかなかった。

「こんなことをやって、少しは足しになるのか」と機械屋が口を利いた。それを潮に、ひと息つくことにした。

「馬穴一杯分が一分間の浸水量と考えればいい。六十回汲み上げて一時間長く船が浮いていられる勘定になる。そ

れだけ命も引き延ばせるといふものさし」

機関室の床を覆っている海水の量を思えば、計算はこじつけに過ぎなかったが、少なくとも馬穴に向かっている間は海を忘れていられる。操舵室に独りで居るよりこの苦役に浸っていた方がいい。杉崎は空の馬穴を放り投げるように下に落とし、水汲みを再開した。

爺さんが食事を知らせてきた。その頃には二人共疲れはてていた。操舵室へ戻ろうとしたが、手足がだるく思うように動いてくれなかった。

四人揃った昼飯の間中、爺さんは魚の悪口を喋っていた。魚は悪賢いそうだ。一度使った疑似餌には二度と使えない。新しい餌を考え、魚との知恵較べに疲れてしまふとこぼしていた。

「魚も爺さんが相手なら手頃だろう」
機械屋がまげつ返す。

「そんなことを言う奴には魚を喰わさない」と睨む。賑や

かなやりとりで操舵室は明るい空気だ。杉崎も一緒になつて笑っていたが、目は笑いとららはらに、窓を通して雲の様子を追っていた。雲は今朝方よりも低く垂れ込め、飛ぶように動きが早くなっている。

時折、波が外板を叩いた。小さな衝撃が伝わってくる。

皆はその音にことさら意識を外らして笑い合っているように思えた。

午後からも交代で水汲み作業を続けた。機関室へ向かう前に、杉崎は爺さんに一つだけ注文した。

「念のためだ、水を詰めた瓶は確り栓をして、転がらないように頼む」

爺さんは真顔で杉崎を見詰め、頷いた。

その夜の四人の寢床は、お互が近くなっていた。マットを室の中央に隙間なく並べて横になった。

風が窓枠を鳴らし始めている。たまに大きな横揺れがやってきた。外板を叩く波の間隔も短くなっている。

「明日の水汲みは止めましょう」

杉崎は暗闇の中で、天井に向かって喋った。誰もまだ眠れないでいることは判っている。

「何故だね」隣から爺さんの声が応じた。

「部屋の丸窓や、甲板の検査孔を閉めて回るんだ。時化てきそうだからな」

できるだけゆっくりと話した。『急ぐことはない、明日で

も間に合う』と知らせたかった。根拠があつてのことではないが、どうしようもない闇の中で、今は三人を早く眠りにつかせたかった。

杉崎は眠れずにいた。慣れない力仕事で軀の節々が痛い。だがそれよりも波の音が耳についた。砂浜の退き波のように、船体をなめては過ぎてゆくうねりの音が気にかかった。

横になった軀に床の浮き沈みを感じる。左右に浅くゆす

られる度に船が軋む。き裂の外板が押し広げられる、そんな

な鳴に聞こえてきてしかたがなかった。

“荒天が来ても沈むことはない。それほどの損傷ではなかった筈だ”

杉崎は記憶をさぐり、白刃のようだった外板からの噴水を出来るだけ小さく思い出そうとした。だが努めれば努めただけ、薄絹を裂くような噴出音が甦ってくる。

杉崎は眠りを諦めて起き上がった。窓から目を凝らしても海は見えない。ただ船に間近く、時折、砕け波がおぼろげに白く浮んでは見定める暇もなく消えてゆく。

突然雲が切れた。月光の走る海上を、黒々と艶光るうねりが高まりながら船に向かっていった。甲板の高さを超えて見えた。

“海が迫ってくる” 杉崎は一瞬、固い床も、一万トンの船の上にいることも忘れてしまった。軀を反らせ、窓際から無意識のうちに退りぞいていた。

月の光りはたちまち薄れ、海が闇に戻る直前、高まりは

沈み、うねりは船に達して船底を抜けた。身構えたほどに傾斜は起こらなかつた。杉崎の軀を軽く窓枠に打ちつけ、浮き沈みに大きな体重の変化の不快感を残していっただけだった。

“あの高さは見間違いだつたのだらうか”

寝床に戻ってから、海面の高まりは目の底に焼きついていた。傾きこそなかつたが、一万トンの船体を軽々と波底に落とす。

“三人が眠った後で良かった”

そう思いながらも、独り寝返りを繰り返しているもう一人の杉崎が、せめてノツポだけでも起きていて欲しいと闇を見詰めていた。

翌朝の海は鉛色をしていた。暗い空が船に向かって閉じ、水平線は飛沫で消えている。

波頂に角のような白波を立てて、うねりが次々と襲ってくる。風が吹きつけて、操舵室のあちこちが鳴り騒ぐ。不規則

な動揺が続き、風上に打ち上がる飛沫が高く、甲板を超えていた。

爺さんを厨房に残して、三人は甲板や船倉を調べて回った。倉口は二重の帆布で覆われていてロープで締めつけてあり、一応の閉鎖処置がされていた。検査孔の蝶番は錆ついでいて巧く閉まらない。ハンマーで叩きながら締めつけていった。

部屋の丸窓や通路の海に面した開口部分を閉じて操舵室に戻ると、爺さんが朝食の用意を待っていた。

温い握り飯と、熱いさ湯は飛沫で濡れねずみになった爺さんがぼつそりと言った。

「火は消したよ。揺れるので飯も炊けない。水も採れないんだ。」

三人は喰べる口を止めた。杉崎が聞いた。「飯は余分に炊いてあるのか」

「二食分ぐらいはな」

「水は……」

「ああ、瓶を縛って、倒れないようにしてあるよ」

「それじゃあ風いだからまた始めればいいさ、爺さんを暇にして気の毒だが……」

「それなら四人掛かりで水汲みをやったらどうだ。皆でやればそれだけ汲み出す量も多くなるだろう」

機械屋が急きこむように言った。「小匙で掬うようなものだ」と初めに反対したことを忘れていた。荒れ始めた海を見て、浸水が気掛かりになってきたのだろう。

杉崎は、今度は反対しなかった。時化が大きくなれば何が起ころか予測がつかない。軀を休めて、体力を養っておく方が得策のように思えた。

「とにかく、機関室の様子を見てくるよ」

杉崎が操舵室を出ると、ノツポも付いてきた。機関室の階段を下まで降りて、杉崎は水際のステップに

腰を下ろした。増水は続いているが、浸水量そのものが増えたかどうかは判らない。爆発して今日で五日経った。機関室全体から見れば、海水はまだ床を覆っただけの僅かな量にも思える。どれだけの水位になれば危険なのだろうか。操舵室から眺めている限り、うねりに乗る時の船の甲板は海面から充分の高さがあつた。これまでの日数で、それほど喫水が深くなっているようには見えなかつた。動揺で、杉崎の軀が揺れる。この時化さえ凌げば、船は思ったより長く浮いていられるかもしれない。だが伝わってくる波やうねりの衝撃が、船体をこのまま見逃してくれる筈は無い。そんな予感がまたもや杉崎を身震いさせた。「き裂した甲板が風下側で良かつたな」暗い水面に目を据えて動かない杉崎に、後ろからノツポが声を掛けてきた。「その代り、風圧で船が風下に傾いている。水圧も大きくなっているだろう」

暫く二人の無言が続いた。今度は杉崎がノツポに話し掛けた。

「今日も水汲みを続けた方がいと思ふか」

「他にやることも無いだろう」

「海ばかり見ているより何かに熱中していた方がいいことは判るが、時化が近づいている。休んで体力を蓄えておいたらどうだろう。もともと機械屋が反対していた通り、こんな大量の水に馬穴だなんて、貴方にも空しいと判っていた筈だ」

「この世の中に、空しくないものなんてあるのかね」またノツポの口調が始まった。杉崎はうんざりだと思つた。

「こんな時に、よくそんな理屈が喋れるな。船は沈むかもしれないんだぞ、恐くはないのか」

「恐いさ、だから喋っていたんだ……。俺はお前さんと埠頭で会つた日を何度か思い出していたよ。雨の中、詩吟を追つて来てくれた時は嬉しかった」

「愚痴ばかり聞かされたと言ったじゃあないか」

「愚痴も羨しく聞けたもんだ。一生懸命、俺は何んなだ」と問い掛けているようで……、俺にはあの時も、今も、そんな意欲さえない」

「それじゃあ、たいして助かりたくもないわけだな」

「そのところがどうもよく判からないんだ。死ぬのは恐ろしいよ、矢張り……」

ノツポは本気になつて、頭を傾げている気配だ。

杉崎は苦笑した。浸水している船の中で、それもこんな暗い機関室の階段の下で、つついノツポの話につり込まれている。

「ようし、とにかく水汲みはやることにしよう」

杉崎は立ち上がった。坐ったまましていると、水面の動きに目が吸い寄せられて気が滅入ってくる。そんな気分を忘れてたかった。

ロープのつるべは二組になった。次第に大きくなってくる

揺れの中で、四人の水汲み作業が始まった。

激しいペースで海水を空けていると、その内に通路に水が滞留し始めた。排水孔が目詰りしたのか、捌けきれなくなったのか。居住区と甲板を仕切っている敷居を斧で壊して、直接風下側の甲板へ水を流すことにした。

憑かれたような動きで、四人は作業にのめりこんでいった。揺れが体勢を崩し、馬穴を曳き上げるロープが幾度か切れた。一人が修理する間も、三人は休まず作業を続けた。

杉崎の頭は虚になっていた。あるのは作業に連携している仲間意識と、手足を動かす惰性だけだった。勝手に腕が動き、軀が屈む。誰一人浸水の量に目を向ける者はいなかった。床に海水がある。だから汲み上げていた。

夜が近づいたのか、通路が暗くなり作業が難しく、汲み上げのペースが落ちてきた。

杉崎は擦り剥けた掌の痛さに耐えきれなくなつて、とうとう手を休めた。杉崎が動きを止めると三人とも次々と

通路に坐り込んでしまった。疲れが一度に吹き出してくる。そんな四人を激しくなつた動揺がなぎ倒した。やがて、ノックを先頭に、一人また一人と這うようにして操舵室の階段の方へ動き始めた。

操舵室へたどりついた四人は床に転がったまま大きく息をついて暫く動かなかつた。

暗さに塗り込められた窓を飛沫が音をたてて叩いていた。よく聞けば雨音も交っている。横なぐりに降りつける大粒の雨だ。

揺れには縦揺や振り回されるような動きも加わっていた。居室の方から、ひっきりなしに器物の壊れる音が聞こえてくる。

離ればなれだった四人はいつの間にか室の真中にかたまっていた。残っていた握り飯をほおぼり、水を飲んだ。お互に顔も見えないほど暗くなっていた。

波が船体に打ちかかり、底鳴りを伴った震動が尾を引

た。杉崎は軀に打ちつけられる鞭のような思いでその音を聞いていた。き裂の外板が剥きだしになって頭から離れなかつた。

荒天が続いた。杉崎の頭には安堵と不安が半ばしていた。天候は、時折激しい雨を交えていたが極端に悪化する兆しは見られない。もしかすれば低気圧の中心を外れているのかもしれない。しかしこの程度の荒天でも、長引けば、傷ついた外板にとつて命とりにもなりかねないのだ。

海は執拗に船を揺さぶり、泡立つ飛沫が窓を洗う。四人はひたすら時が経ち、朝が近づくのを待っていた。夜明けの光りに波を鎮める力は無いにしても、明るさは震える心を鎮めてくれる唯一の望みに思えた。

時は遅く過ぎた。幾十度、窓ごしに望んでみても、東の空に明るさの気配は無かつた。やがて動揺に、心よりも軀の方が慣れてきた。

杉崎は水汲みで疲れ、待つことにも、軀を竦めているこ

とも疲れはててしまった。いつの間にか、浅い眠りに入っていたようだ。

つかの間の眠りに感じた。頭を殴られたような衝撃で目を開けると、明るさが飛び込んできた。夜明けだ。それも窓からの空は高く、白さを交えた雲が見えた。

三人はまだ眠りこんでいる。風は相変わらず窓枠を揺すっていたが、動揺は幾分小さくなった気がする。低気圧の中心を逸れていたのだ。こんなにも早く荒天が過ぎてくれたとは幸運だった。船体は時化に保ちこたえたのだ。嬉しさ一杯で起き上がり、窓辺に近づいた杉崎は海を望んで顔色が変わった。

「海面が近い！」鎮まりを見せ始めた波の頂が、甲板に届くかと思えるほど船体が沈んで見えた。

八 真 実
「起きるんだ」

杉崎の大声で、三人は次々に飛び起きた。

「風いだのか……」

爺さんはのんびりと遠くの海を眺めた。ノツポが真先に気付いた。

「機関室へ行ってみよう」

居室への階段へ走った。続いた杉崎は途中で転びそうになった。船が傾斜していて、いつもと足もとの感じが違う。

機関室のドアを開けて下を覗いてみた。懐中電灯の光りを当ててみるまでもなかった。油膜を混えた黒い水面がすぐそこまでせり上がってきている。機械類のほとんどが水没し、防水毛布を支えていた支柱が外れ一面に漂っていた。杉崎は海水が今にも通路にまで溢れてくるのではないかと思わず逃げ腰になったが、錯覚だった。船の揺れにつれて、押し寄せては退いてゆく。

それにしても、一晩でこれだけの浸水量だ。支柱が外れたせいだけだとはとうてい考えられなかった。時化で外板

のき裂れつが大きおおくなったのだ。

四人よにんは呆然ぼうぜんとして立ち竦すくんでいた。

「上うへへ戻もどろう」

震ふるえる声こえを抑おさえて、杉崎すぎさきは促うながした。

「汲くみ出ださないのか」

機き械かい屋やは痰たんの詰つまったようこえな声だを出だした。

「これかだけの海かい水すいをか、どうにもなるものか」

吐はき棄すてるように言いって、杉崎すぎさきは独ひとり先さきに操そう舵だ室しつへ戻もどつた。

西にしの空そらに晴はれ間まが見みえていた。雨あま雲ぐもは東ひがしへ追おわれている。

海かい面めんにはまだ灰はい色いろを残のこしていたが、うねりの様さまはゆるやか

で、明あからかに荒こう天てんは終おわりを告つげていた。それでも時とき折おり、時し化け

残のこりの波なみ頭がしらがいたぶるように船ふねへ揺ゆさぶりをかけてくる。

荒こう天てんが短みじかく過すぎてくれたことは確たしかに幸こう運うんだった。だが

すでに傷きずついていた船ふねにとつては想そう像ぞうしていた以上いじょうに、

荒こう天てんそのもので致ちめい命てき的な痛いた手でを受うけたのだろう。

窓まどごしの海うみが近ちかくに感かんじる。船ふねが急きゆうに小ちいさく思おもえてきた。

杉崎すぎさきは縋すがる目めを周しゅう圍ういの海うみに向むけた。どちらを向むいても淡あわい

灰はい色いろ一いっ色しよくだった。どこにも逃にげ場ばはない。胸むねが苦くるくなつ

て吐はき気けがしてきた。足あしがひとりでにさまよい、うろろうと

歩あるき回まわる。頭あたまが熱あつくなり、鉛なまりを詰つめ込まこれたように重おもい。

「どうすれば……」焦あせりだけがこみあげてくる。何なにも

考かんがえられなかつた。

ノッポが戻もどってきた。

「あとどれくらい保もつ……」

杉崎すぎさきは頭あたまを振ふった。

「一日いちにちか、二日ふつかか……」

頭あたまを振ふり続つづけながらも、ノッポの言こと葉はで杉崎すぎさきが少すこし落おち

着ついてきた。

「間違まちがいなくこの船ふねは沈しずむ。だが今いますぐではない。浸しん水すい量りょう

の予よ想そうはつかないが、四よつつの船ほー倉ろどと船せん尾び側がわの船せん体たいでまだ暫しばら

くは浮ういていられる」

ひる ちか
昼が近づくにつれて、空は明るさを増し、海も濃い紺色に
かわ
変ってきた。

「機械屋や爺さんはどうしている」

な
泣きやんだ子供のよう、杉崎は尋ねた。

「爺さんはまた水造りを始めたよ。飯も炊くそう。機械屋
ひと みず
は独りで水をかい出している」

「無駄だと言っただろう」

「〃ひと汲みで一分でも浮いていられる」と力んでいるよ」
すぎさき まえ おし はなし
杉崎が前に教えてやった話だ。

「それが何になる。船に出会わなければ、どうせ俺達は死ぬ
んだ」
なに ほうほう
「何か方法があるだろう」

ノツポは杉崎の顔色を窺っている。

「無い！」

いらだ
苛立って、怒鳴り声になった。頼られている様子が煩わ
しかつた。どうすることも出来ないのだ。

ノツポはそんな杉崎を暫く見ていたが、やがて軀を返
し、ドアの方へ歩きだした。

「どこへ行くんだ」

「機械屋を手伝うよ」

「買い物にでも出かける調子だ。杉崎も仕方なく付いて行
こうとした。」

「お前さんは来なくていい！」

きめつけるように言った後、ゆっくりと言葉をついだ。
みは ひつよう
「見張りも必要だろう。海を見ていてくれ。その間に、何
か助かる方法を考えだしてくれないか」

杉崎はもう独りにはなりたくなかった。軀が震えてくる。
すぎさき ひと
「何故いつも俺ばかりに押しつけるんだ。俺はも
う……………」

ノツポは杉崎の肩に手をのせた。

「お前さんは、ともかくも二年間商船大学にいたんだ。頭
なか おれたち うみ ふね はい
の中には俺達より海や船が入っている筈だ。そいつを絞り

出してくれないか、頼むよ……。それがお前さんの義務なんだ」

最後は消えているように低い声だったが、杉崎には聞き逃がせなかった。

「義務……、義務とは何だ。何故俺だけにそんなものがある」

迫られて、ノツポは溜息をついた。暫く言い渋っていたが、口を開いた。

「まだ気が付かないのか……。俺達三人を船に残したのはお前さんなんだ」

杉崎は一瞬息が止まった。言葉の意味が掴めずにいた。

「そんな馬鹿な……。俺が何をしたというんだ！」

喚きかかる杉崎へ、ノツポは諭すように話した。

「お前さんを除いて、三人の共通点は何だと思う。この船の新参者で、海については素人だということだ。

そんな俺達を雇入れ、わざわざ船に乗せたのは、恐らく

海難事故の証人に仕立てあげたのだらう。初めの予定では船が爆発した後、一緒に退船させる積りだったのだと思う。

そこへお前さんが現われた。素人なら俺達と同じ扱いで良かったが、商船大学の三年生だと知った。奴等にとって、この計画は大きな投資だ。万に一つも失敗は許されない。

そこで急抛予定を変更し、夜の間に船を棄てることにした。計画を見破られる可能性のあるお前さんを船に残して殺すためだ。仲間以外でお前さんの乗船を知っていた俺達が道連れにされたのは当然の成り行きだったというわけさ」

「この俺がどうして機関室の爆発まで見破れるというんだ」

とても俄に頷ける話ではない。

「お前さんの能力まで誰も考えないよ。商船大学三年生と聞けば、誰もが船に詳しいと思うだろう。少なくとも計画にとつては危険な存在になる。」

皮肉なものだな、当人は劣等性だとこれだけ言い張っているのに」

「貴方の憶測に過ぎない話した」

反撥するが、杉崎の声は弱くなった。

「機械屋も言っていた疑問だ。他に巧い答えが考えられるのか。わざわざ俺達を殺す為に雇入れ、沈めるために船へ乗せたというのか……」。

それに奴等の判断はある程度の射っていた。保険詐欺だと最初に言い出したのもお前さんだったし、お前さんが居なかったらたぶん船はもつと早くに沈んでいただろう。事故が起った時、やみくもに慌てふためく俺達とは違って、別な行動をとるかもしれないと考えた奴等の判断は間違っていないかった」

杉崎は思い出した。爆発のあった翌日、保険詐欺の話を持ちだした時、機械屋が噛みつくように反対して、ノッポに同意を求めた。そのときノッポの態度はどこか腑におちなか

った。受け答えが投げやりで、話しを打ち切りたい様子に見えた。杉崎に向けていた顔が何か言葉を残している感じだった。今の話はあの時からすでに考えついていたことなのだろう。

「何故、今まで黙っていた」

「話したところでどうなるものでもない。皆を混乱させるだけのことだ。できればお前さんにもこのまま言わずに済ませたかった」

やがてノッポの姿が操舵室から消えた。話だけが杉崎の胸に烙印を押していった。

確かに筋は通っている。いや恐らく間違いないだろう。今思えば、船倉から出て部屋をあてがわれた日の夕方、あの色黒の一等航海士がわざわざやって来た。"商船大学生か"と念を押していった。その時のうろたえた顔付きがノッポの推測にそのまま嵌めこめる。

杉崎は操舵室を出た。のろのろと船尾の甲板まで歩いて

いった。手摺りから身を乗り出すと、二、三米下の外板を波が洗っていた。このまま浸水が続き船尾が沈めば、高い水圧で浸水量も更に多くなる。甲板まで海面が届けばすべてが終りになる。

杉崎はそのまま船首へ回った。一番舳先の甲板へ坐りこんだ。船尾が低くなったぶんだけ舳先が持ち上がり、小さな動揺も増幅して伝わってくる。その度に軀が左右に揺れる。ノツポの用意してくれた発煙用の缶はとつくに流されていた。もう一度準備しようかとも思ったが立ちあがるのが億劫だった。

折った膝を両腕で抱いて頭を垂れた。// 独りで死のうが、四人死のうが俺の知ったことか// と呟いていた。

あの男はどんな神経を持っているのだろう。自分の死に引き金を引いた人間だと知っていて、今日まで素振りにも頭さなかつた。話しの間でも責めている気配は少しも感

じられなかつた。杉崎にとつてはむしろ責めてくれた方が良かったのだ。// 俺だつて好き好んで乗つたわけじゃあない// と怒鳴り返せた。

// どうしたらいいんだ//

虚に上げた目に、重く沈んだ船尾が傾いて見える。操舵室との間で、何かが風にはためいていた。船倉を覆っている帆布のようだ。昨夜の波に叩かれて、破られてしまつたのだろう。二番船倉の片隅で、蓋板が剥き出しになつていた。

// 船倉に水が入っていれば、あれでもお終いになるな//

確かめなければと、杉崎はやつと立ちあがる氣になつた。船倉へ近寄つてゆく間に、突然頭へ血が込み上がつてきた。// 蓋板、板、木……古い船だ、もしかすれ

ば……// 駆ける足になつた。

閃いた通りだつた。蓋板は木製だつた。倉口の中央に梁を渡し、両側から厚板を並べ掛けて閉

鎖する古いタイプの倉口だ。今まではほとんどの船が鋼製に変えられていて滅多に見掛けなくなっている。

杉崎は居室へ走った。

通路の薄暗がり

で、ノツポと機械屋がうずくまっていた。

「駄目だな、水はどんどん増えている」

杉崎を見て、ノツポは顔を上げた。機械屋は俯いたまま

だ。

「筏を作るんだ！」

ノツポは動かない。

「そんな材料がどこにある。寄せ木細工じゃあないんだぞ。

木っ端で組んでみても海の上で一時間と保つものか」

「二人共来るんだ」

声を荒くして、二人を引き立てた。途中で爺さんも呼んだ。

だ。

倉口の帆布を剥がすと、きつちりと二列に並んだ厚板が

現われた。三米ほどの長さで、幅四、五十糎、厚さは

十糎近くありそうだった。

「これを繋ぐんだ。六枚も使えば四人が充分乗れる筏が出来る」

「倉口を開ければ、中へ水が入りやしないか」

時折飛沫が飛んでくる。機械屋は心配顔だ。

「どうせ沈むんだ。そんなことは気にするな。それよりも、

どうやって作る。作った筏をどうやって降ろすんだ。海の上

でも組み立てようというのか」

ノツポは蓋板の大きさを見て、すぐさま作る気になっ

た。

「降ろさなくてもいいんだ。船の上へ乗せて置けば、沈んだ

とき自然に浮いてくる。正規の救命筏でもその式のもの

がある」

「どうしても沈むのか」

機械屋はまだ船に未練がありそうな口ぶりだった。誰も応

えない。

「時間が惜しい。すぐに始めよう」

杉崎は爺さんに、倉庫から大工道具を持ってくるように頼んだ。

蓋板は時化で水気をたっぷりと吸っていた。二人掛かりでやつと動く。海に浮いてくれるかどうか、気になるほど重かった。あの固いらワン材さえ浮かぶのだと杉崎はその心配を追い払った。

筏は操舵室に近い三番船倉の上で作ることになった。初めは、船匠部屋から探してきた太い釘や、かすがいを使って厚板を繋ごうとした。作業は捗ったが、海面の大きな上下動を目にして気がついた。海に浮かべたとたんばらばらにされるだろう。

四人で議論になり、結局六枚の蓋板をワイヤーで縫うようにして繋ぐことに決った。板を並べて間へワイヤーを通し、一枚、一枚回してゆけば六枚は連なる。板の間隔をつめるため四人一緒になって締めつけた。それでも隙間が開く。

そこから海水が上がってきても、浮いていられることが第一条件だと皆で納得した。

誰一人として大工の経験は無かった。海上で筏にどんな力が掛かってくるものか予想もつかない。めいめいが勝手に想像し、作業員になり指揮者になった。

時間に追われるように船内を駆け巡り、ワイヤーや金具を探してきた。

やつと集めた材料で、筏の縫目は四本にしかならなかった。不安がつきまとい、思い思いにロープを使って補強していった。

空腹と疲れと、夕暮れが重なってきて、四人はようやく仕事の手を止めた。船倉の上に並んで、筏の出来映えを眺めた。

ワイヤーの端や、縛りつけたロープの先端がすだれのように筏の脇からはみ出ている。スマートとも、心丈夫ともほど遠かったが、とりあえずは浮かびそうに見えた。

帆柱も立てたかった。天幕も欲しかった。だが四人とも朝からの働きづめで、これ以上作業を進めようにも、軀の方が動きそうにもなかった。

「あとは明日でもいいんじゃないのか」

杉崎のひと声をきっかけに、四人は操舵室へ引き揚げるこ

居室へ入る手前で、杉崎は爺さんを呼び止めた。

「水の瓶だけは今日のうちに、筏へ縛りつけておいてくれないか」

爺さんの顔色が変わった。

「まだ大丈夫だよ。万一の用心だ」

杉崎の微笑に誘われるように、爺さんは頷いた。側にいた機械屋にも手伝いを頼んで、杉崎はノツポと船尾の様子を見に行くことにした。

船尾は朝方見たときよりもはるかに沈んでいた。時々やってくる海面の高まりで、水は甲板のすぐ下にまで近づいた。

「沈んだものだな」

ノツポが目を剥いた。

「朝から二米は沈んだようだ。しかしこの分だと、少なくとも朝までは保つだろう。それにこの辺りは海水の入るところがない。甲板まで水が届いてもすぐに沈むことはないだろう。それより問題は機関室だ。隔壁がいつまで浸水した水の圧力に耐えられるのか判らない」

「壁の片側から、積荷の米袋が支えになっているのだから」

「ぼろ船だからな。海水が船倉の方へ滲み出ているかもしれない」

「機関室へ行ってみようか」杉崎は続けて出かけた言葉を呑みこんだ。溢れてくるような海水の様子を見て、恐怖を抑えつけていられる自信がなかった。「もうすぐ暗くなる」と

自分に言い訳して、そのまま操舵室へ戻ることにした。

タラップを上がりながら、杉崎は話し掛けた。

「今夜は念の為だ。救命胴衣を付けて寝た方がいいな」

前を上るノツポは立ち止まり、海に顔を向けた。

落ちかかる夕日が水平線近くの層雲を染めていた。下辺が柔らかい黄金色に縁どられ輝いている。白波もまばらな

ほどに凪いでしまった海上を、幅広い紅の帯が幾本にも

なつて広がっていた。一本がノツポの横顔を染めている。

「あの筏で、何日生き延びられる」

呟くように聞いてきた。

「水と食糧があれば、十日や二十日は大丈夫さ」

「調子のいい科白だな」

ノツポは小さく笑い声をあげた。

再び上り始めたタラップの二、三段上で、杉崎も頬に

夕日の紅を感じた。暖さはない。

見渡す限りの海を、広く、暗く、黄昏が沈めてゆく。

八九 月下の海V

その夜、四日振りに月が昇った。夜更けて杉崎は甲板に出てみた。四日前の夜と同じように、波には無数の微小な月が写り、輝線となつて船ばたまで伸びていた。

あの夜は置去りされたはかなさで泣きたしたい気持だった。浸水が増し、追い詰められている今不思議に涙がない。

ノツポには真実を突きつけられた。沈没も時間の問題だ

“これ以上、何が起こる”半ばすてばちな気分もあった。

筏を思いつけたことも救いになっている。操舵室へ上る

タラップでノツポは笑った。確かに、どれだけ命を引き延ば

せるかは判らない。しかし少なくとも生きる望みへの繋ぎに

はなつたことだろう。ノツポに対する負い目が少しは軽くな

つた気がした。

杉崎の影が甲板の上にだるまのように丸まって貼りついて

いる。全身に浴びている光りを追つて杉崎は月にまで顔を

を上げた。

“こんなに明るいんだ、筏作業を進めておくんだつたな”

あせ 焦りではない。いつになく心が逸こころつてはやいる自分じぶんにきづ気付き
びしょう 微笑が浮うかんできた。

そうだしつ もと 操舵室そうたしつに戻ると、待まっていたように誰だれかが近寄ちかよってきた。
つきかげ はい 月影つきかげに入ったばかりの眼めで顔かおがよく見みえない。救命胴衣きゅうめいどういを
き 着きこんでいるのだらう。胸むねと背せ中なかが膨ふくらんでいた。

おれ 「俺おれ………、泳およげないんだ」

ひそ 潜ひそめた声こえは機械屋きかいやだった。

すぎさき おも 杉崎すぎさきは思おもわず笑顔えがおになった。// どうしても沈しずむのか 筏いかだ
づく 作りづくにとりかかると前の心細まえ気こころな口調くちようは船ふねへの未練みれんだけで
なかつたようだ。

なん 「何なんだ、そんなことか。」

ふね しず 船ふねが沈しずんだとき、泳およげない奴やつほどよく助たすかるそうだ」

「どうしてなんだ」

およ やつ 泳およげない奴やつは仕方しかたなく何なにかに継つがるだらう。その方ほうが体力たいりよく
しょうもう しょうもう 消耗しょうもうしないで済すむ。なまじ泳およげる奴やつほど動うごき回まわって疲勞ひろう
するんだ。それに、貴方あなたの付つけてある救命胴衣きゅうめいどういは大人おとなでも

に 二、三日浮さんいちゅうかしていられるように出来できている」

ほんとう 「本ほん当とうだらうな………」

うそ 「嘘うそをついて何なんになる。救命胴衣きゅうめいどういは検査けんさに合格ごうかくしたものし

つ か積つんでいないよ」

きかいや せ 機械屋きかいやの背せが心こころもち伸のびた気きがした。

ねむ 「それより、もう眠ねむった方ほうがいい、泳およげないことより疲つかれて

あぶ いる方ほうがもつと危あぶないんだ」

きかいや なつとく 機械屋きかいやはやつと納得なつとくしたようだ。寢床ねどこへ戻もどりかけた。杉崎すぎさき

お は追おいかけるように言いった。

うみ はい 「海うみへ入はいるときは必かならず一いっしょ緒いに居いるよ」

たの 「頼たのむ………」

くらやみ ぼつそりと、暗闇くらやみから返事へんじが返かえってきて杉崎すぎさきの心こころも和なごん

ふね うえ はじ だ。この船ふねの上うえで初はじめて口くちにできた、自じぶん分の言ことば葉はのように思おも

えた。

がいはん あら 外板がいはんを洗あらう波音なみおとがゆるやかなリズムをとって耳みみに届とどく。

ふね ゆ 船ふねは揺ゆりかごのような周期しゅうきで揺ゆれていた。杉崎すぎさきの瞼まぶたが少すこし

ずつ重くなる。

「何が起こるか判らない。起きていよう」

幾度か頭を振って目を開けた。だが波のリズムが杉崎を

いつしか浅い眠りに引き入れていた。

船全体を揺さぶる轟音が杉崎を軀ごと叩き起こした。あらゆるものが一挙に雪崩れ落ちる騒音とともに、船が大き

く傾いた。

杉崎も他の三人も折り重なって床を這り落ち、操舵室の

端の壁に打ちつけられた。

窓ガラスが破れ、降り注いでくる海水が四人の悲鳴を塞

いだ。絡み合い、もがきながら、杉崎は傾斜した床をなん

とか這い昇ろうとしたが、濡れてすべる。体勢が思うように

直せない。そのうちに揺れ戻しがやってきた。船が傾きか

ら次第に立ち直ってくる。奔流してきた海水と一緒に、

四人は操舵室の中央まで押し戻された。再び反対舷への

傾斜が始まる。

「甲板へ出るんだ！」ノツポが叫んでいる。

杉崎は這いずりながら、片手がドアへ掛かった。押し開

けて外へ転がり出ると、機械屋も続いた。ノツポが爺さんを

抱え上げるようにして連れ出してきた。

月明りに晒された甲板は三十度近くも傾いて見えた。

船尾の片側が海水に浸っている。隔壁が崩れ落ちたのだ。積

荷の片寄りが起こったのに違いない。

四人は軀を寄せ合うようにして息を殺していた。揺れる

振幅は少しずつ小さくなり、やがて右舷に十度ぐらいの

傾斜を残したまま静止した。まだ時折小さい振動が船底か

ら湧いてくる。その度に甲板が鈍く震えた。船は船尾から

徐々に海へ吞まれているようだ。

「逃げよう！」ノツポが爺さんと手摺りの方へ動こうとした。

「待ってくれ」杉崎が抑えた。見詰めていると海面の上昇

はそれほど早くない。

「とにかく船首の方へ移動しよう」

杉崎が先にたつて、船倉のある甲板へ降りた。四人は高みへよじ登るような格好で一番船倉の陰に辿りついた。

振り返った甲板は迂り台のようだ。傾斜が段々と深くなっている。ゆつくりと海面が這い昇ってくる。居室の裾が波に洗われたした。

杉崎は恐怖を忘れてしまっていた。沈没は今まで常に頭から離れたことがなかった。想像しただけで気持が萎え、不安に怯えていた。だが事態は予告も無しに突然やってきて、恐しさを思う暇さえもなかった。恐怖は現実に吸い込まれてしまい、近づいてくる海だけを凝視していた。

「待つんだ」

確かな声で三人の動きを止めていた。海へ逃げだす時期が早過ぎれば、浮いてくる筏から遠くなるかもしれない。辿り着くまでに体温が奪われるか、見失うおそれがあった。遅ければ船体の沈没する渦に巻き込まれてしまう。勘に頼る他なかった。杉崎は忍び寄ってくる黒い海を見詰めていた。

海面が四番船倉の甲板にまで届いた。船首が一段と持ち上がる気配がした。

「今だ！海に跳び込め、船から離れるんだ」
ノッポと爺さんは手摺りを越えて海へ跳ねた。機械屋が動かなかつた。

「跳び込むんだ！」
機械屋は両手で手摺りに縋り、迫ってくる海水に目が釘づけされている。

「跳ぶんだ！」
杉崎は慌てた。手摺りにかかっている指を外そうとしたが、固く握り締めて離れない。傾斜が増してくる。足もとが迂る。機械屋の頬を激しく平手打ちした。目をつり上げて睨んだ瞬間両手が緩んだ。その隙に腰を持ち上げ海へ突き落とした。尾を引く悲鳴を追って、杉崎も船影で暗闇に見える海面に向かって跳んだ。

軀が海中深く、垂直に刺さりこむ。手足をやみくもに

動かし、息苦しきの手前でどうにか頭が海面の上に出た。

すぐ近くで白く泡立っていた。機械屋がもがっている。泳ぎ寄るとむしやぶりついてきた。両腕にからまれて一緒に沈みそうになる。何度か海水を吞まされ、杉崎は思いきって自分で軀を沈めた。機械屋の腕が慌てたように外れた。

少し離れて顔を出すと、頭上に船首が聳えていた。夜空を区切って高くなっている。船から遠ざからなければ危ない。今度は機械屋へ背後から近づいた。救命胴衣の背紐を掴んで懸命に海水を蹴った。

顔が水面から出ているせいか機械屋はおとなしくなった。しかし波が邪魔をして気ばかりが焦り、手足は空しく海水と格闘する。迫り上がった舳先が今にも倒れかかってきそうな恐怖に襲われた。疲れてきた。

その時、急に辺りが明るくなった。今まで月光を遮っていた船首がみるみる低くなってゆく。同時に強い力で両足が巻かれた。杉崎の軀は海中へ引きずり込まれた。

重い水圧が胸を締めつけてくる。腕や足が過流で振られ、振りまわされる。詰めていた息がこらえきれなくなつて、口内へ海水が押しこんでくる。血で充満した頭がはちきれそうだ。

「駄目か………」

諦めが掠めたとき、突然軀が軽くなった。回転しながら浮かび上がる気配だ。長い時間に感じた。苦しくて呼吸のように水を飲み、腕も動かさなくなった。意識が薄れかかる直前、軀が海面に飛び出していた。夢中で吸いこんだ息で、喉がしゃがれた笛のような音をたてた。

周囲に無数の泡の群れがあった。気泡は後から後から湧き上がってくる。煮えたぎるようにざわめいていた。泡と一緒に木片のようなものが矢のような勢いで海中から飛び出してくる。

杉崎は機械屋の姿を探した。泡立ちも消えかかり、辺りが静まってくると独りきりでいることの心細さが迫ってきた。

き

海水の冷たさが衣服を突き抜いて軀の芯まで染みこんでくる。探しあぐね、泳ぎ疲れて、小さな流木を見付けると近寄っていった。そこに機械屋がいた。流木に覆い被さって漂っていた。

「大丈夫か……」杉崎の声に、力の無い咳こみが返事をした。

「ノッポや爺さんは……」月明りの海面を透してみた。筏が命だ。巧く浮かび上がってくれ祈るような気持ちだった。

目の位置が低くて遠くまでは見通せない。波の高まりを待つて、立ち泳ぎの軀を伸び上げてみた。浮遊物ばかりで、筏らしいものは目に入らない。

静かさに冷たさが心細さを倍加させる。じつとその場に留っていられなかった。杉崎は機械屋の縫っている流木を浮遊物の密集している方へと少しずつ移動させていった。

「おーい」

精一杯に呼んでみたが、声は頼りなく波に吸われてすぐ消えてしまう。「ノッポも爺さんも沈んでしまったのは……」思いが掠めてうろたえがはしる「落ち着け」と声に出した。

杉崎はもつと大きな流木を探しはじめた。縫っている流木は二人では小さ過ぎる。

どれだけ時が経ったのか、かすれ弱まってきた呼び声の後に、どこかで別の声が続いた気がした。耳を澄ましていると、確かに波の峰をこえてやってくる。遠いが、力がこもっていた。

夢中で叫び返しながら、流木を声のする方へ必死で曳きにかかった。

幾度目か、波頭での伸び上がりで人影が見えた。月明りの中に立っている。

「筏だ！ 筏に乗っているのだ」

人影は、片手を大きく振っている杉崎を見付けたようだ。

立ち姿が海に飛び込み、泳ぎ寄ってくる。ノツポだった。ふたりが二人掛かりで機械屋の流木を筏に向かつて曳いていった。筏には爺さんも居た。水際で手をさし伸ばし、三人の近づくのを待ち構えていた。

引き揚げられた機械屋の軀がまだ動いているのを見きわめて、杉崎も筏の上で転がった。空に向かつて何度も大きな息をついた。真上の月が眩しいほどに白い、ノツポが機械屋の呑んだ水を吐かせにかかっている。呻く声が思ったより力強くて、杉崎は安心した。とにかく、四人揃って生き延びられたのだ。

「気分はどうだ」ノツポが覗きこんできた。

「大丈夫だ」杉崎は軀を起こした。

「俺達は運が良かった。筏の方から漂ってきてくれたんだ。ワイヤー一本切れてはいなかったよ。当分は浮いていられそうだ。」

頷きながら、杉崎は筏の様子を眺めた。意外に広く感じ

る。畳、四畳ほどの大きさに見えた。しかし広さの他には何も無い。帆柱も天幕も準備できていなかった。たとえ準備していたとしてもあの船の沈み方で、海中から一緒に浮かび上がってきたかどうかは疑問だ。

六枚の厚板を固定せずに連ねたことは幸いしたようだ。船の上からではそれほどに見えなかったうねりも、海面では空が傾くほど大きかった。筏を乗せては盛り上がり、波低に向けて滑走させる。筏を振り、折り曲げようとするが、ワイヤーでの六枚の連なりは海の曲面に逆らわない、しなるように動いていた。

うねりの表面には大小の波を載せていた。筏は波へ潜るように沈みこむ。その度に隙間から海水が容赦なく吹き上がってくるが、その分だけ動揺は小さく収まっていた。杉崎は気がついて筏の上を見回した。真水の瓶がどこにも見当たらない。

「水はどうした」慌てて尋ねた。

「これだけなんだ。あとは流されてしまった」

ノツポが後ろから一升瓶を一本差し出した。中には水が半分ほどしか入っていない。

「今、機械屋にも飲ませたからな」

「縛りつけておかなかったのか」

思わず爺さんに向かって怒鳴った。

「確かりと縛っておいたんだ」

爺さんは泣きだしそんな声で答えた。

「爺さんの責任じゃあない。あんな沈み方じゃあ何だって

流されて仕舞うさ。一瓶残っただけでもみつけものだったんだ」

ノツポが慰めるように仲にたつた。

「水が無くて、この先どうやって生きる」

杉崎は喚きだしたくなった。

横になっていた機械屋が起き上がって、筏の隅を調べはじめた。

「何をしている」

ノツポの声に、振り向いた機械屋はビニールに包んだ何か重そうなものを胸に抱いていた。

「見せろ」

ノツポが無理矢理包みを取りあげると、機械屋の顔が歪んだ。

開けてみあ持ち出してきたものだ。

「こんなものを……」

ノツポが呆れかえっている隙に、機械屋は素早く歯車を

拾い、大事そうに包み直した。

「俺が見付けたんだ。詐欺の証拠品だ。保険会社へ持ってゆく」

「謝礼金が目当だな」ノツポが極付けた。

「取り引きするんだ」

機械屋は肩を怒らして、言っただけのけた。

杉崎は腹が立った。

「そんなことを考える暇があったら、何故一升瓶一本で

も流されない算段をしなかった。そんなものがこの筏の上
で何の役に立つ」

こんな身がってな男を助けようと、冷たい海の中で命
懸けになつていた自分が情けなかった。

機械屋は三人の視線を跳ね返すように喋った。

「お前達には判るものか、俺は若い頃から油まみれで働
いてやつと作り上げた鉄工所を騙し盗られたんだ。

保険会社と取り引きした金でもう一度工場を取り戻す。騙
した奴等の鼻を明かしてやるんだ。誰にも邪魔はさせない
ぞ」

ノツポはそんな機械屋を暫く見詰めていたが、やがて声
を和らげた。

「判ったよ、誰も邪魔はしないよ」

杉崎は怒りが収まらない、機械屋に背を向けた。爺さん
もそつぽを向いた。

ノツポが側に戻ってきた。穏やかな顔をしている。杉崎

は聞いた。

「真当にあんなもので大金が貰えると思つているのか」

「知らないよ。ただ確かなことは、あれが奴のこれからの生
きる支えになる」

海に向けた表情は冷ややかにさえ見える。杉崎にはノ

ツポがまだ判らないでいた。漂流する筏の上で水も無い。
どうしてこんな顔をしていられるのだろう。

「女房や子供が待つているんだ……」

低くなった機械屋の声が後ろから聞こえてきた。

隣合った厚板が波の乗り工合で違った動き方をする。

時々軀がねじ曲げられた。

ノツポが反吐を吐いていた。不規則な揺れに酔ってきたの

だろう。杉崎は今になって気がついた。船酔いがなくなつて

いる。船倉から這い出して以来、船に酔った覚えが全くな
い。練習船が思い出された。できるものならもう一度乗つ

てみたい。船酔いから解放されるのなら、海や船に今度は親

しみを^も持てる^もかもしれない。

声^{こゑ}が跡^{あと}切^きれて時^{とき}間^{かん}が過^すぎてい^つつた。疲^{つか}れもあ^つつた。濡^ぬれたま^ままでい^いる寒^{さむ}さもあ^つつた。何^{なに}よりもほ^ほとん^{とん}ど^どの水^{みず}を失^{うし}な^なった。ま^ままでい^いる寒^{さむ}さもあ^つつた。何^{なに}よりもほ^ほとん^{とん}ど^どの水^{みず}を失^{うし}な^なった。こ^ことが四^よ人^{にん}を無^む口^{くち}にし^してい^いた。おま^まけに食^{しょ}料^{りょう}も無^ない。ど^どうや^いつて生^いき延^のび^のればい^いとい^いうん^んだ。や^やつと考^{かん}え^えつ^つけた。杉^{すぎ}崎^{さき}の筏^{いかだ}も、た^たか^かだ^だか苦^{くる}しみ^{しみ}の一日^{いちにち}か二^ふ日^{つか}、命^{いのち}を延^のば^ばす^すだけ^{だけ}のもの^{もの}だ^だつ^つた^たの^のか。

東^{ひがし}が白^{しろ}み^みはじ^じめ^めた。晴^{せい}天^{てん}だ^だつ^つた。日^ひが昇^{のぼ}れば、皆^{みな}も少^{すこ}しは元^{げん}気^きづ^づくだ^だら^らう。着^き物^{もの}も乾^{かわ}き、海^{かい}水^{すい}に洗^{あら}われ続^{つづ}けてい^いる足^{あし}や腰^{こし}にも温^{ぬく}り^りが戻^{もど}つて^てくる。

杉^{すぎ}崎^{さき}は次^{しだい}第^{だい}に明^{あか}る^るさ^さの増^まして^てくる水^{すい}平^{へい}線^{せん}の様^{さま}を眺^{なが}めて^てい^いた。日^ひの出^で 太陽^{たいよう}……”

杉^{すぎ}崎^{さき}は大^{たい}変^{へん}な誤^ご算^{さん}をし^してい^いたこ^こに気^き付^づいた。日^ひ射^しを忘^{わす}れ^れて^てい^いたの^のだ。考^{かん}え^えて^てみ^みれば、四^よ人^{にん}はこ^この海^{かい}域^{いき}で^での直^ち射^{やく}日^{にっ}光^{こう}を^をま^まだ一^{いち}度^ども味^{あじ}わ^わつ^つたこ^ことが^がな^ない。

操^{そう}舵^だ室^{しつ}で^での暮^{くれ}し^しで^では^はい^いつ^つも海^{うみ}風^{かぜ}が吹^ふき抜^ぬけて^てい^いて、初^{しよ}夏^かの

暑^{あつ}さ^さを感^{かん}じ^じたこ^ことが^がな^なか^かつ^つた。水^{みず}汲^きみ作^{さき}業^{ぎょう}は船^{せん}内^{ない}で、筏^{いかだ}作^{さく}り^りは薄^{うす}曇^{くも}りの下^{した}だ^だつ^つた。後^{あと}は時^{とき}化^けの海^{うみ}だ。

南^{みなみ}の海^{うみ}のこ^この季^き節^{せつ}に、遮^{さえ}ぎ^ぎるもの^{もの}のな^ない筏^{いかだ}で太^{たい}陽^{よう}を迎^{むか}え^えれば忽^{たち}ち天^{てん}下^かの暑^{あつ}さに晒^{さら}さ^される。筏^{いかだ}の上^{うへ}には帆^{はん}布^ぷ一^{いつ}切^{せき}れ乗^のつて^ては^はい^いない。昨^{さく}夜^や、月^{つき}の光^{ひか}りを借^かり^りて^てでも作^{さき}業^{ぎょう}を進^{すす}め^めてお^おくべ^べきだ^だつ^つた。い^いや、気^き付^づく^くの^のが^がほ^ほん^んの少^{すこ}し早^{はや}ければ筏^{いかだ}は浮^ふ遊^{ゆう}物^{ぶつ}に囲^{かこ}まれ^れて^てい^いた。何^{なに}か、日^ひを遮^{さえ}ぎ^ぎるもの^{もの}が探^{さが}し出^だせ^せたか^かも^もし^しれ^れな^なか^かつ^つた。今^{いま}では散^ちり果^はて^て流^{りゅう}木^{ぼく}一^{いつ}本^{ぽん}見^み当^{あた}ら^らない。全^{すべ}て^てが後^ご手^てに回^{まわ}つて^てしま^まつ^つた。風^{かぜ}は止^とまり、波^{なみ}も消^きえて^てい^いた。海^{うみ}は明^{あか}るい灰^{はい}色^{いろ}に磨^{みが}き^きつめ^めら^られて、ゆ^ゆつ^つた^たり^りと上^{じよう}下^げし^して^てい^いる。そ^その合^{あい}間^まから明^{あか}る^るさ^さが^がや^やつ^つて^てくる。

夜^よ明^あけ^けだ。紅^{べに}色^{いろ}の幅^は広^{ひろ}い道^{みち}が現^{あら}われ、や^やが^がて黄^{こが}金^ね色^{いろ}の一^{ひと}筋^{すじ}が覗^{のぞ}いた。太^{たい}陽^{よう}が昇^{のぼ}つて^てき^きた。杉^{すぎ}崎^{さき}は栗^{あわ}立^だつ思^{おも}い^いで、日^ひの出^でに目^めを据^すえて^てい^いた。

先々のことを煩わなければ、太陽はありがたかった。日の出間もない日射でも、筏の上はすぐに暖くなった。服を脱ぎ手足を伸ばしていると、軀が干しあがってくる。服も乾きはじめた。だがそのうち、俯き、横に、絶えず姿勢を変えていかなければ暑くてやりきれなくなってきた。高度を上げた太陽は、四人に逃れるすべのない熱射をそそぎだした。最先に、肌の白いノツポが鳴をあげた。焼けつきそうだと服を着たが、襟や袖口が乾いた塩で固くなっていた。身動きする度に皮膚に擦れて、首筋や手首に赤い湿疹ができた。仕方なくまた下着だけになった。三人も服を脱いだだが、軀へ太陽がまともに照りつける。上着を海水に浸して頭の上へ掲げてみた。陽はいくらか遮ぎれたが、すぐに腕が疲れてくる。頭へ被れば、暑さでむせかえり息がつまりそうだ。杉崎は袖を肩口から千切り、それを広げて頭に乗せた。海面からの照り返しで、顔や胸には痛いほどの熱を感じる。たまらず、海水を両手で掬って軀じゅうに浴びた。二、

三分もすれば乾いてきて、塩が全身の毛穴を塞ぐ。以前よりも一層苦しみが増した。塩を落そうと、また海水を被る。繰り返して間断の無い責め苦が続く、救いを求めるように仰ぐ太陽は中天から動こうともしなかった。

「水を飲ましてくれ」

爺さんが喘ぎながら近寄ってきた。

「まだだ、杉崎の言葉に、ノツポは持っていた一升瓶を改めて膝へ抱えこんだ。

爺さんが海面に顔を近づけた。

「飲むんじやあない」杉崎は慌てて止めた。

「判ってるよ。頭を冷やそうと思っただけだ」爺さんは力のない笑いを浮べた。

「いや、爺さんに言ったんじやない。自分に言ったんだ」回りの海水は陽を受けて紺色に変っていた。全く旨そうな飲み水に見える。

海水が飲めると主張していた男のことを思いだした。

まわりの人々の止めるのを振り切つて、男は独り、北太平洋を幾十日も漂流する生体実験をやつてみせた。海水を飲めば死ぬ。船乗りの常識に生身で挑戦したのだ。凄じい男も居たものだど印象に残つている。「今この海水が飲めれば……」考えただけで生唾が湧いてくる。だが悲しいことに杉崎は結論を覚えていた。真水と海水を六対四ぐらゐの比率で飲み続け、飲料水の量を飲み延ばした結果にとどまつている。杉崎達には飲み延ばせるだけの水さえも無かつた。

「いよいよの時が来たら、腹一杯飲んでやる」ひたひたと旨そうな音で寄せている海水を睨んでみると「お前にそんな勇気があるものか」嘲笑う声を聞いた気がして、頭を巡らしたとき目眩いを感じた。大急ぎで海水を頭から被つた。「そろそろ漁船に出会ふかもしれないぞ、東の方へは相当流されたからな」力づけようと喋つた積りが独り言になつた。三人とも、ぐつたり横になつたまま何の反応も見せ

なかつた。

狂つてしまいたい暑さだつた。海を見てみると飛び込みたい衝動に駆られる。細めた目で空を見上げ、あの太陽は動いているのかと疑いたくなつた。

「もういいだろう。一口ずつ水を飲もう」

我慢も限界だつた。

干涸びた杉崎の声で、ノツポは怒つたように一升瓶を突きだした。瓶の表面が抱きしめていた汗で濡れている。水に近い彼が一番辛い思いをしていたのだろう。最先に飲ませた。

ノツポは喉仏を二度動かして瓶を口から離した。機械屋も二口飲んだ。瓶を唇から離そうと、両腕が細かく震えていた。

爺さんが飲み、杉崎も飲んだ。水は一升瓶の底へ、四分の一ほどに減つてしまつた。

「預つてくれ」杉崎の頼みに、ノツポは黙つたまま瓶を受

けとると、また膝の間に挟みこんだ。

僅かな水の補給で、渴きは却って激しくなった。耐えきれなくて、昼が峠を越えるまでに、四人はもう一口ずつ水を回し飲んだ。

苛立ち、顔を上げる。動かぬ太陽に目が焼きつくされる。

遅い時の歩みだった。

横たわり、身動きする気力も失せた頃、やっと昼の終りが見えてきた。

太陽が西に低くなり、死んでいた大気が緩みはじめた。焼かれた肌を労わるように風が吹き抜けた。責め苦から解放されてゆく。吐息が交互に聞こえてきた。

「お前さんはよくやったよ」

夜が近づいて、隣のノツポがきれぎれに声を掛けてきた。杉崎は空を見ていた。全身の皮膚が痛い。気を紛らしたくて、輝きはじめて星を数えていた。他のことに考えがおよぶのも恐かった。

「いや、沈没のことでも見込み違いをしたし、失敗ばかり

だった。もう一度漂流するときにはもつと頼り甲斐のある船長になっておくよ」

精一杯、冗談ごかしで返事した積りが、本音がでて言尾が潤んでしまう。

「もう二度 大学へ戻れるものなら……」

「漁船に出会おうと言っていただろう」

機械屋が聞いてきた。

「可能性はあるさ。一時間に一哩流されたとする。五日で一二〇哩だ。二〇〇斤以上にはなる。伊豆半島の南方にも近い筈だ」

もう何度も同じことを口にしていて、自分でも本当に漁船と出会えそうな気になってくる。

「時化の日は別だが、船はいつも船首を西の方へ振った形で流されていた。海流は船体の沈んだ部分へ比例した力で働くから、船尾の沈んだ分だけ余計に流圧がかかって

いたのだ。いつも潮の流れがあった証明になる」

話している間に段々と考えつけてきたことだ。我ながら

らもつともな理屈だと、少しは船乗りらしい気分になった。

「時化の日の西風も勘定に入れば、もう少しの辛抱だ」

話に力をこめたが、機械屋の返事はなかった。暫くたつ

て、

「歯車のごときは勘弁してくれよ。汗水流してやつと作り上

げた会社だったんだ。どうしても取り戻したかつ

た………」

細い声は続く。

「もし俺が死んだら、歯車を家族に届けてくれないか。

住所は………」

「止せよ」横合いから、ノツポが話しを遮った。

「誰も伝えやしないよ。明日になれば判ることだ。俺の親父

が海に飛び込んだ時も、誰も手をさし伸べなかったそうさ。

当てもなく太平洋の真中を漂っていると、生きている者も

死んでゆく者もたいした違いには思えなくなるそうさ。だから、もしその歯車を家族に届けたかったら、まず貴方が生き

残ることだ」

機械屋はそのまま黙ってしまった。

「生き残る」杉崎に、考えたくなかった明日が思い浮か

だ。あの暑さは死ぬことよりも恐ろしい。

夜が更けた。朝がそれだけ近づいてくることだ。星空は

どこを向いても、陰り一つ見いだせなかった。

「爺さんが弱っている」

ノツポの小声で起こされた。開いた目に、紅に染まりはじ

めている水平線が飛びこんできた。祈る思いで全周の空を

見渡したが、矢張り雲一つ見当らない。

機械屋はまだ眠っていた。寝顔は青黒くむくんでいる。海

から筏へ上がるまでに相当海水を飲んでいたようだ。その

せいかもしれない。

爺さんは呼吸が早くて苦しそうだ。昨日の暑さは地獄だった。夜の僅かな湿りと睡眠だけでは、痩せた年寄りの軀をどうてい癒すことができなかったのだろう。

一分でも遅い日の出をと東に目を向けた。明るさが増し、一歩、一歩朝がやってくる。

「残っていた奴等の顔が浮かぶよ。俺達を見ていたら、さぞやきもきすることだろうぜ。金が手に入るかどうかの瀬戸際だからな」ノツポが地獄を目の前に最後の軽口を利いた。金色の矢が海を走った。

「水を飲ませろ」

日はまだいくらも昇っていないかった。せがんだ機械屋の唇が白くひび割れている。

「まだだ」ノツポが怒鳴り返した。一升瓶を股に挟み、両手で上着をかざしていた。横たわっている爺さんの顔を陽から庇っているのだ。疲れてくると杉崎が替った。ささげた腕がすぐに痺れてくる。気を抜けば、上着は爺さんの顔に被さ

りそうになる。日に晒されて、背の生皮を剥かれるようだ。顔が歪んでくると、ノツポの手が替ってくれた。機械屋は坐りこんで、ぼんやりと海を眺めていた。

だしぬけに、筏の外側のワイヤーが弾けて飛んだ。縫目の一本がみるみる解けてゆく。

杉崎とノツポは慌てて、真中辺りのロープを解いてワイヤーに代えた。筏の隙間が少し広がった。

調べてみると、厚板に回していたワイヤーが交叉した箇所で擦れ合って、筏が昇降する度に磨耗していたようだ。念のため他の三本の縫目も調べてみた。幸いすぐに切れる気配はなかった。筏に使ったワイヤーは船内を探して持ち寄った使い古しのものばかりだった。切れた一本が特に弱っていたのかもしれない。いずれにしても外側だっただけに大きな力がかかる。代替えのロープが尽きたら、残る三本の縫目も危くなる。できるだけ長持ちしてくれと祈る他ない。どれだけの間、筏の修理にかかりきっていたのだろう。

ふたり 同時に気付いて爺さんを振り返った。

機械屋が上着をかざしていた。両腕が垂れて今にも倒れそうだと。急いで杉崎が替った。機械屋はそのまま爺さんの横に崩れこんだ。

「水を飲めよ」ノツポは機械屋に瓶を差しだした。

筏の上は盛りの陽を浴びていた。激んで光る回りの海面は受けとめた熱のすべてを集めて四人に注いでくる。大口を開け、犬のような息が詰りそうだった。

最後の水を飲むことに決めた。一口ずつぐらいにしかあたらぬ。この熱さでは一滴にも感じられないだろう。

爺さんにはノツポが助け起こして飲ませた。機械屋が飲み、杉崎にも先に飲めと推めた。渡された水は瓶の底と見分けがつかないほどに減っていた。杉崎はその半分を飲んで瓶をノツポに返した。

水を受けとったノツポの様子がおかしかった。一升瓶の口を握ったまま目を据えている。喉元がひきつるよう動

いていた。最後の水を飲み惜しんでいるように見えた。

「早く飲んで仕舞え」

杉崎の苛立った喚きで、ノツポは踏ん切ったように、もう一度爺さんを抱え起こした。最後の水は爺さんの口内に注がれて、唇からこぼれた一筋が日射を跳ねた。

もう誰にも爺さんに上着をかざす余力は残っていないかつた。

横たわり、呻き、海水を被った。渴きに筏の上を駆け回り、ひたすら責め苦の和らぐ日の傾きを願った。だが非情な太陽は動きも見せず、筏の四人を焦がし続けていた。

「生きていて、何になる」

杉崎は夕暮れの赤い大気に虚な目を向けていた。涼風が立って、いためつけられた軀に僅かずつだが生気が戻ってくる。

明日はもう一滴の水も無い、干し上がった四人の誰も、あの暑さには再び耐えられないだろう。いや杉崎は二度と耐

えたくなかった。何もかもが面倒に思えた。このまま海へ入つてもいい。日焼けた痛みや渴きも癒し、海は心地良く迎えてくれるだろう。空には黄色く、星が生まれはじめていた。

「爺さんに水を飲ませたとき、嫌な顔をしていたな」

枯葉でも揉みしだくような声で、ノツポが話してきた。

杉崎は応えるのが億劫だった。もうどうでもいいことだ。

「どうでもよいことだと思っっているな」

暗さの近づいた海で、しわがれた声が気味悪かった。人間の心を読むさとの化物のようだ。考えていたことを二度も言い当てられた。

ノツポは頬がこけ、落ち窪んだ目を杉崎に据えていた。

目玉だけをぎらぎらと光らせている。

ノツポが爺さんに最後の水を飲ませた姿は確かに嫌味だ

った。英雄を見せつけられたようで顔をそむけたかった。

「口を利かない方がいい。疲れるだけだ」

杉崎は突き離れた。

「いや、お前にだけはぜひ判って貰いたいんだ」

かすれた声のどこかに湿りを感じた。

「洞爺丸事件を知っているか」

「ああ、台風でやられて沈んだ連絡船だろう。千人以上の

人間が死んだ」

突然の話しに戸惑いながら答えた。

「乗客の中に牧師がいた。自分の付けていた救命胴衣を

外して、他の乗客に渡した。貰った奴は助かり、牧師は死

んだ」

「ノツポは何の話をしているのだろう」意図が判らない。

「あの牧師は偽善者だ。俺はそう思っつて今まで生きてきた」

言葉の間に吸う息が混った。

「自分を犠牲にしたのだ。善意に間違いないだろう」

「牧師は救命胴衣を渡さなくても生きてはいられなかった

だろう。人間を救うのが仕事だからな。自分の満足を得るた

めにやった行為だ。真底からの善意じゃあない」

「詭弁だ。ひねくれ者の考えることだ」

「そうかもしれん。俺のお袋は親父が死んでから一年もた

たない内に再婚した。俺が小学校の二年の時だった。それ

以来、俺はお袋を信じなくなった。牧師でも友達でも信じ

られた人間は誰も居なかった。

大学を卒業して種々な職業についた。どこも長続きし

なかった。最後に入った荷役人夫の世界さえ、長年仲間だっ

た爺さんを役に立たなくなつたからといって放り出そうと

した。そんな奴等ばかりの世の中だ。たいして惜しくもない

一生だと思つて、今まで生きてきたんだ」

「それと爺さんの水と、どんな関係がある」

「爺さんに飲ませた水は、牧師の救命胴衣だ。俺は確かめ

たかった。あの牧師が偽善者だったかどうか。どうしても知

りたかつた……」ノツポは這いずるように話していた。

声を喉の奥から絞り出してくる。

「俺は爺さんの水を飲む様を見ていた。喉仏が動いたとた

ん、水を飲ませたことを後悔していた。腹を引き裂いてでも

水を取り戻したくなっていた。今でもあの水のことを思う

と、飲みたくて気が狂いそうだ。

今ならあの牧師が信じられる。俺は考え違いをしていた

んだ。たとえ牧師がいやいやながら救命胴衣を渡したとし

ても、それが真物の人間だったということだ。人夫仲間だっ

て自分達の生活を守りたかつたんだ。そつちの方が真物だ。

嘘や奇麗ごとが混っているから世の中なんだ。俺はそれが

今になってやっと判つた。あの牧師から順番に人間を信じ

たい。もう一度世の中でやり直してみたい……残念だ」

俯き、肩を小刻みに震わしている。ノツポは声を殺して

泣いていた。杉崎は、この男の感情が初めて崩れた様を

呆然と眺めていた。

「残念だとはどういう意味だ」

ノツポは頬を上げた。

「おざなりは止める。俺達は死ぬんだ。今夜目をつぶれば、

全部お仕舞いなんだ……」

息切れて、吐息が断続している。

「だが判らず終いよりはましだったかもしれないな」

涙をふつきるようなノツポの呟きが夜風に千切られて

海に消えた。

長い話で精力を使い果たしたのか、ノツポは上を向いて目を閉じた。

杉崎はノツポの荒い息使いの胸辺りを見詰めていた。

「死にはしない。俺が助けてやる。三人ともだ。必ず助けてやる。」

思わず大声を出していた。根拠も何も無かった。この男を殺したくない。腹の底から湧きでた思いが無意識に声になった。

ノツポの目が開き杉崎を覗きこむように見た。

「本当だな。本当に安心して目を閉じてもいいんだな」

「ああ確かだ」杉崎は大きく頷いた。

まばたきもみせず向けていたノツポの顔が急に、にやりと崩れた。

「貴方はどうやら真物の船長さんになったようだな、立派なものだ」

喋り終ると、ノツポはごろりとまた上を向いた。目を閉じて、肩はまだ震えていた。

杉崎も夜空を見上げた。昨夜のように星を数えはじめた。

「明日一日を生きてみよう。明日だけだ。そうすれば、またこの星を数えることができる」

飛沫が顔にかかって目が覚めた。起き上がると、気温が下がってきたのか朝風が少し冷たかった。うねりも出てきたようだ。筏が持ち上げられる。沈みかかる直前に、白み始めた東の方で何かを見たような気がした。

急いで海水を顔にかけた。水平線に目を据えて次の高ま

りを待った。波長の長いうねりがやってくる。タイミングを
合わせて、杉崎は筏の上に立ちあがった。

「見える！」けし粒ほどだが漁船の群れが見える。二度、
三度と、波頂に立って確かめた。「間違いない！漁船だ」涸
れ果てていた筈の両眼からみるみる涙が溢れだした。

「三人に知らせよう！」叫びかかった声が喉元で詰った。
機械屋は歯車の包みを抱いて眠っている。爺さんの胸もま
だ動いていた。

助かったと安堵したときが危ない。そう聞いたことがある。

「四人揃って助かるんだ。どうすればいい……」

杉崎は坐り直していた。

横にノツポの寝顔があった。肩をそつと揺すりはじめた。

「先ず相談することだ」

群小の漁船はもう坐ったままでも目に入ってくる。形

を次第に大きくし、海域一杯に広がっている。

拭っても、拭っても視野は潤んでしまう。

鉛色の海が明るく灰色にあけてくる。(了)